

*Tattvasaṃgraha* 及び *Tattvasaṃgrahapañjikā*  
第 18 章「推理の考察 (Anumānaparīkṣā)」  
和訳と訳注 (3)

志 賀 浄 邦

I. はじめに

本稿は、*Tattvasaṃgraha* (以下 TS) とその注釈 *Tattvasaṃgrahapañjikā* (以下 TSP) 第 18 章「推理の考察 (Anumānaparīkṣā)」の和訳研究であり、同著者による『和訳と訳注 (2)』 (=志賀 [2008]) に接続するものである。TS/TSP「推理の考察」章全体に関する参考文献・略号については『和訳と訳注 (1)』 (=志賀 [2007]) を参照されたいが、今回新たに使用する参考文献<sup>(1)</sup>・略号については本稿末尾に挙げている。

同章 (vv. 1361-1485) 中、今回訳出する箇所 (vv. 1455-1485) では、「推理は正しい認識手段として認められうるか」という問題をめぐって種々の学派と仏教徒の間で論争が繰り広げられる。登場する対論者とその主張の内容は以下の通りである。(a) バールハスパティヤ派 (チャールヴァーカー派、ローカーヤタ派) による「推理は正しい認識手段ではない」という主張、(b) 文法学派による推理批判、(c) 「他者のための推理は正しい認識ではない」とするある対論者の見解、

---

<sup>(1)</sup>今回訳出する箇所 (TS 1455-1485) については、KUNST[1939] の他、以下のような翻訳研究 (いずれも部分訳) が存在する。

- ・生井 [1996: 446] (TS 1456 の和訳), [1996: 127] (TS 1481-1482 の和訳), [1996: 128] (TSP 528,16f ad TS 1483 の和訳), [1996: 129f, n.57] (TS 1483 および TSP 528,17-529,12 ad TS 1483 の和訳・解説)
- ・畷部 [1994: 6-15 with n.8-22] (TS 1459=VP 1.32, TS 1460=VP 1.33, TS 1461=VP 1.34 の和訳と解説)
- ・畷部 [1998: 114] (TS 1459=VP 1.32, TS 1461=VP 1.34 の和訳), [1998: 116] (TS 1475, 1476 の和訳)
- ・RAU[2002: 9] (TS 1459=VP 1.32, TS 1460=VP 1.33, TS 1461=VP 1.34 の独訳)
- ・赤松 [1998: 87ff] (TS 1459=VP 1.32, TS 1460=VP 1.33, TS 1461=VP 1.34 の和訳)
- ・STEINKELLNER[1997] (TSP 526,17f ad 1475-1476=PV 1.31 の英訳と解説)
- ・戸崎 [1979: 154-157] (TSP 523,16f=PV 3.82 の和訳と解説)
- ・桂 [1977: 126] (TSP 524,16f=NMukh (桂 [1977: 125])=PVSV 153,19f の和訳と解説)

(d) Purandara の推理観, (e) 論争する両者の間に生じる問題と Aviddhakarṇa の見解, である。以下にそれぞれの概要をまとめておきたい。

まず (a) について, そもそも言語表現を通じて他者に自身の意図・主張を伝えようとする者は, 間接的に推理が正しい認識手段であることを承認しているはずである。しかしながら, バールハスパティヤ派は, 「推理は正しい認識手段ではない」と主張する一方で, この同じ言語表現によって自らの意図・主張を対論者である仏教徒に理解させようとしているのである。仏教徒はバールハスパティヤ派のこの言動が<自身の言葉との矛盾>であると鋭く批判している。その他, バールハスパティヤ派は, 「自分のため [の推理] は, 正しい認識手段ではない。三条件をもつ証相を前提としているから。誤った知識のように<sup>(2)</sup>」という推論式を立て, 三条件をもつ証相にもとづく推理が正しい認識手段であることを批判する。この見解に対し仏教徒は, <三条件をもつこと>と<整合性をもつこと>と<正しい認識手段であること>の三者の関係性を確認した上で, この推論式における証因が矛盾因であることを指摘する。

(b) では, 文学学派 Bhartṛhari による推理批判が取り上げられている。Bhartṛhari は, ある事物の能力はその状態・場所・時間に応じて絶えず変化するため, 推理によって事物を確立することはできないと主張する。この見解に対して Śāntarakṣita/Kamalaśīla は, Dharmakīrti の教説 (PV 1.13ab, 1.31) を援用し, 証因が正しく識別され, 所証との間に同一関係あるいは因果関係による結合関係が認められれば, 証因が所証から逸脱することはなく, 推理者の熟練度に応じて別の結果が生まれることもないと答えている。

(c) では, 「他の者」によって, 「他者のための推理は, 話者にとっては繰り返しであるから, 正しい認識手段ではない。一方, 聞き手にとって [も], [他者のための推理は] 他でもなく自分のため [の推理] である<sup>(3)</sup>」という前主張が提出される。これに対する Śāntarakṣita/Kamalaśīla の答論の概要は以下の通りである。まず, 言語表現が<他者のための推理>と述べられるのは聞き手を考慮してのことである。その上で, 言語表現は, 論証能力をもつもの (=三条件をもつ証因) つまり推理の原因となるものを示すことから, 転義的用法によって, あるいは習慣的に<他者のための推理>と呼ばれる, と。

(d) では, バールハスパティヤ派 (あるいはニヤーヤ学派) に属していたと考えられる Purandara という論師が登場し, 「チャールヴァーカー派の人々によっても, 世間一般に承認された推理は認められうる。しかしながら, ある人々によって世間的な道を越えて推理と述べられるものは否定される<sup>(4)</sup>」と主張する。それに対して仏教徒は, 世間の人々がいう推理も論理学者たちのいう推理も, 因果関係あるいは同一関係にもとづく限りは実質的に同じものとなり, 仏教徒のいう推理が否定されることもない, と答えている。

(e) について, 対論者は以下のようなアナロジーを展開する。ある人が敵から剣を奪った後, その剣によって敵を殺すことができるのと同様に, 立論者自身は推理の妥当性を認めていないとしても, 対論者が正しい認識手段と認めるその推理を用いて対論者の主張を否定することができる, と。これに対して Kamalaśīla は, 以下のようにこのアナロジーの不備を指摘する。剣であ

<sup>(2)</sup>TSP 520,18f ad TS 1456.

<sup>(3)</sup>TSP 522,15f ad TS 1462-1463.

<sup>(4)</sup>TSP 528,9f ad TS 1482.

ると思つて敵から取り上げたものが、迷妄から実際には剣ではないとわかつた場合、それによつて敵を切ることはできないのと同様に、正しいと認識手段であると見なして対論者から採用したものが、迷妄から実際には正しい認識手段ではないとわかつた場合、それによつて対論者に正しい認識を生じさせることはできない、と。以上の返答に対して、さらなる反論を展開しているのが Aviddhakarṇa である。彼の説はニヤーヤ学派の見解として引用されることが多いが、ここでは、*Tattvaṭīkā* という著作名と共に以下のような説が紹介されている。「言語表現を本質とする推理は、話者 (= 立論者) にとって正しい認識手段ではない。しかしながら一方で、話者はそれ (= 言語表現を本質とするもの) によつて対論者に [自らの主張を] 理解させる [ことはできる]。[その際話者によつてなされる] 努力は、対論者に [自らの主張を] 理解させること [のみ] を目的としているので、必ずしも両者にとって確立されたものが必要とされるわけではない。<sup>(5)</sup>」この反論に対して Śāntarakṣita は、言語表現としての他者のための推理は、<未だ知られていない対象を明らかにすること>がないという点で話者にとっては正しい認識手段ではないことを認めた上で、論証能力をもつもの (= 三条件をもつ証因) を示すという点では、正しい認識手段であると主張する。つまり仏教徒は、言語表現が正しい認識手段と認められるかどうかは、<論証能力をもつものを示すこと>の有無によると考えたのである。

前稿・前々稿に続き、本稿でも、仏教徒の見解を思想的・歴史的に精査することのみにとどまらず、対論者として登場するインド哲学諸派の論師それぞれの思想とその背景にも注目し、8世紀インド思想界における論争の様相を包括的に理解することを目指す。なお、TS/TSP「推理の考察」章の和訳研究は、本稿をもつて完結するため、補遺として、TS/TSP「推理の考察」章のテキスト訂正一覧 (Appendix I) と TS/TSP「推理の考察」章に引用される文献・テキスト一覧 (Appendix II) を収録した。

## II. 翻訳にあたって

### (a) 今回訳出する箇所各資料の位置

#### 1. TS 1455-1485

- (Skt.) K 1456-1486; S 1455-1485; J73b3-75a4; KUNST[1939: 84-111].
- (Tib.) KUNST[1939: 84-111] (D4266, vol. 18, ze 53b3; P5764, vol. 138, 'e 65a7); Co ne, vol. 112, ze 53b1-54b2; dGa' ldan manuscript, vol. 89, 'e 68a1-69a6.

#### 2. TSP ad TS 1455-1485

- (Skt.) K425,18-433,9; S520,13-529-23; J168b2-171a2.
- (Tib.) Kunst(T) 198,20-211,14 (D4267, vol. 19, 'e 36a2-40b5; P5765, vol. 139, ye 66a3-71b5); Co ne vol. 113, 'e 41b7-47a6 ; dGa' ldan manuscript, vol.90, ye 73b2-80a4.

<sup>(5)</sup>TSP 529,14-16 ad TS 1484.

**(b) TS/TSP「推理の考察」章 (vv. 1455-1485) シノブシス**

7. バールハスパティヤ派による「推理は正しい認識手段ではない」という前主張 (vv. 1455-1458)
  - 7.1. 総論 (v. 1455)
  - 7.2. 第一の推論式 (v. 1456)
  - 7.3. 第二の推論式 (TS 1457) と推理に付随する種々の過失 (v. 1458)
8. Bhartṛhari による推理批判 (vv. 1459-1461)
9. 「他者のための推理は正しい認識手段ではない」という他者の見解 (vv. 1462-1465)
10. バールハスパティヤ派の見解に対する批判 (vv. 1467-1473)
  - 10.1. 第一の推論式における証因が矛盾因であることの指摘 (v. 1467, TS 1456 に対して)
  - 10.2. 喩例の不備の指摘と第二の推論式に対する批判 (v. 1468-1470, TS 1456-1457 に対して)
  - 10.3. TS 1458 に対する答論 (v. 1471-1473)
11. Bhartṛhari の見解に対する批判 (vv. 1474-1477)
12. 「他者のための推理は正しい認識手段ではない」という他者の見解 (TS 1462-1465) に対する批判 (vv. 1478-1480)
13. Purandara の反論とそれに対する答論 (vv. 1481-1482)
14. 論争する両者の一方が推理を正しい認識手段と認めない場合に生じる問題 (vv. 1483-1485)
  - 14.1. 正しい認識手段でないものによって生み出される認識の誤謬 (v. 1483)
  - 14.2. Aviddhakarṇa の反論 (v. 1484)
  - 14.3. Aviddhakarṇa の見解に対する答論 (v. 1485)

### III. TS/TSP 「推理の考察」章和訳 (vv. 1455-1485)

#### 7. バールハスパティヤ派による「推理は正しい認識手段ではない」という前主張

##### 7.1. 総論

(J73b3; D53b3; P65a7)

一方、誤った見解をもつある人々は、[「推理は正しい認識手段ではない」という] これらの言葉によって [自身の] 意図を [他者に伝えようと] 望むにもかかわらず、「推理は正しい認識手段ではない」と述べる。<sup>(6)</sup>

na pramāṇam iti prāhur anumāṇam tu kecana /  
vivakṣām arthayanto<sup>(7)</sup> 'pi vāgbhir ābhiḥ kudṛṣṭayaḥ //TS 1455//

(J168b2; K425,20; S520,13; Kunst(T) 198,21 [D36a2; P66a3])

「ある人々」とは<sup>(8)</sup>、バールハスパティヤ派の人々<sup>(9)</sup>等のことである。「これら [の言葉] によって」とは、「推理は正しい認識手段ではない」というような形式をもつ [言葉] によって<sup>(10)</sup> [ということである]。以下のことによって、[Śāntaraksita は] <自身の言葉との矛盾><sup>(11)</sup>を述べる。

<sup>(6)</sup>cf. KUNST[1939: 84]: “Und doch drücken diese Sophisten mit diesen Worten eben das aus, was sie zu sagen wünschen.”

<sup>(7)</sup>arthayanto JS : arpayanto Kunst/K (cf. rig byed par 'dod pa'i T)

<sup>(8)</sup>kecaneti JS : kecid iti K : lta ba ngan ba kha cig ces bya ba T

<sup>(9)</sup>「Bārhaspatya」という呼称は、この派の祖師の一人と考えられている Br̥haspati に由来する。TSP では他にチャールヴァーカー派 (Cārvāka, TSP 520,18)、ローカーヤタ派 (Lokāyata, TSP 524,14) という呼称も見られ、これら三者は区別なく用いられている。本稿では、生井 [1996: 1-3] の見解に従い、便宜上この派を「バールハスパティヤ派」と総称することとする。ただしテキスト・文脈に応じて、ローカーヤタ派、チャールヴァーカー派という呼称を用いる場合もある。この派の著作については、生井 [1996: 5-15 with n.11-33] も報告しているように、*Bārhaspatyasūtra* (*Cārvākasūtra*, *Lokāyatasūtra* とも呼ばれる)、*Paurandarasūtra*、Kambalāśvatara 作の *sūtra* (TSP 635,18f ad TS 1863)、*Tattvopalavasīṃha* (Jayarāśi 作) 等が挙げられるが、そのうち現存するのは *Tattvopaplavasīṃha* (S. Sanghavi and R. C. Parikh (ed.), *Tattvopaplavasīṃha of Shri Jayarasi Bhatta*, Varanasi 1987) のみである。バールハスパティヤ派の具体的な思想と引用断片については、生井 [1996: 5-52] に詳細に解説されている。また、渡邊 [1994] は、この派の認識論・論理学に関する引用断片を網羅的に収集し、断片相互の関係について詳細に論じている。

<sup>(10)</sup>de lta bu la sogs pa tshul gyis T for evamrūpābhiḥ

<sup>(11)</sup><自身の言葉との矛盾>という過失の指摘は、すでに NMukh に見られる。NMukh (桂 [1977: 113]): 為顕離余立宗過失，故言「非彼相違義能遣」。若相 (\*) 違義言声所遣，如立一切言皆是妄。

(\*) 相 em. by 桂 [1977: 113]: 非 text.

(= PVA 526,19: yadi viruddhārthavācinā svavacanena bādhyate yathā sarvam uktaṃ mṛṣeti.)

また、PS における主張の定義、

PS 3.2 : svarūpeṇaiva nirdeśyaḥ svayam iṣṭo 'nirākṛtaḥ /  
pratyakṣārthānumānāptaprasiddhena svadharmiṇi //

すなわち、「言語表現としての証相にもとづいて、[自身の]意図は[他者に]理解される」と考え、他者に自身の意図を知らせるために言語活動を行う者は<sup>(12)</sup>、推理が正しい認識手段であることを示した[ことになる]。しかしながら、[その同じ者が]「それ(=推理)は、正しい認識手段ではない」と述べる時、まさにそのこと(=推理が正しい認識であること)は否定される。従って、相互矛盾となる。<sup>(13)</sup> またこの論駁は後に[より]明らかにされるであろう。(1455)

## 7.2. 第一の推論式

(J73b4; D53b4; P65a8)

[チャールヴァーカ派が] 伝えるところによると、[推論式 1:] 「自分のため [の推理] が [正しい] 認識手段であることは正しくない。三条件をもつ証相を前提としているから。例えば、[論証しよう]と望まれたことを排斥する [証相] によって生じる誤った知識のように。」<sup>(14)</sup>

trirūpaliṅgapūrvatvāt svārtham mānaṃ na yujyate /  
iṣṭaghātakṛtā<sup>(15)</sup> janyaṃ mithyājñānaṃ yathā kila //TS 1456//

(J168b3; K426,3; S520,18; Kunst(T) 199,6 [D36a4; P66a6])

そこ(=TS 1456)において、まず、チャールヴァーカ派の人々は[以下の論証によって自説を]正当化する。[推論式 1:] 「自分のための推理は、正しい認識手段ではない。三条件をもつ証相を前提としているから。誤った知識のように。」[例えば] 「眼等は他のためのものである。集積したものであるから。ベッド・イス等といった[住居における一連の]構成要素<sup>(16)</sup>のように<sup>(17)</sup>」という[推論式における]集積したものであるから」というこの[論証しよう]と望まれたことを

においては、<自身の言葉>は<信頼できる人の言葉>と同列に扱われ、<自身の言葉との矛盾>は、「信頼できる人の言葉によって排斥されない」という正しい主張の規定に反することになる。(TILLEMANS[2000: 129-131]) その他、NP, NB では、以下のような実例と共に<自身の言葉との矛盾>が言及されている。

NP 2,13-22: sādhayitum iṣṭo 'pi pratyakṣādiviruddhaḥ pakṣābhāṣaḥ. tadyathā ... svavacanaviruddhaḥ, ... svavacanaviruddho yathā mātā me vandhyeti.

NB 3.52: svavacanānirākṛto yathā, nānumānaṃ pramāṇam.

<sup>(12)</sup>vyavaharātā J (cf. tha snyad du T) : vyāharātā KS

<sup>(13)</sup>cf. NBPS D97b7f; P120b1f: 'jig rten rgyang phan pa rnams ni gzhan dag la rang gi brjod par 'dod pa'i don lkog tu gyur pa / tshig rtags de med na mi 'byung ba'i sgo nas rjes su dpog par byed kyang / rjes su dpag pa tshad ma ma yin no zhes bya bar rab tu shes te / de'i phyir rang gi tshig dang 'gal ba brjod do // 「ローカーヤタ派の人々は、他の人々にとって、自身の意図する事柄は知覚されないものであり、言葉[という]証相がそれ(=意図する事柄)と不可離関係にあることによって[その証相にもとづいて]推理が行われるにもかかわらず、推理は正しい認識手段ではないと理解する。それ故、自身の言葉と矛盾する[主張命題]が述べられる。」

<sup>(14)</sup>訳については、生井[1996: 446]も参照のこと。

<sup>(15)</sup>-kṛtā JK/Kunst : -kṛtāj S

<sup>(16)</sup>NBṬ 180,13f ad NB 3.47: śayanāsanādyaṅgavad iti śayanam āsanaṃ ca te ādī yasya tac chayanāsanādi puruṣopabhogaṅgaṃ saṅghātarūpam より。

TILLEMANS[2000: 50, n.176]も参照のこと。

<sup>(17)</sup>この推論式は、NP 142,6, NB 3.47; 3.87にも現れる。

排斥する[証相]は、[誤った証相であるにもかかわらず]三条件を備えているため、**誤った知識であるといわれる**。<sup>(18)</sup>これ(=誤った知識)が「生じる」とは三条件をもつ証相から生じるということである。(1456)

### 7.3. 第二の推論式と推理に付随する種々の過失

(J73b4; D53b4; P65a8)

また、[推論式 2:]「証相が三条件をもつことは、推理知の原因ではない。[正しい]推理ではない場合でも[三条件をもつことは]あるから<sup>(19)</sup>。[証相が]二条件をもつ[場合]のように。」これ故、[正しい認識手段としての]推理は存在しない。

bhāvād ananumāne 'pi na cānumitikāraṇam /  
dvairūpyam iva līngasya trairūpyam<sup>(20)</sup> nāsty ato 'numā //TS 1457//

(J73b5; D53b5; P65b1)

あらゆる論証において、推理との矛盾、[特定の性質と]矛盾する諸々の[証因]、また二律背反[を導く証因といった過失]が起こりうるからである。

anumānavirodhasya viruddhānām ca sādhanē /  
sarvatra sambhavāt kiñca viruddhāvyabhicāriṇaḥ //TS 1458//

(J168b3; K426,5; S520,21; Kunst(T) 199,13 [D36a5; P66a8])

また<sup>(21)</sup>、[推論式 2:]「三条件をもつことは、推理知の原因ではない。[正しい]推理ではない場合でも<sup>(22)</sup>[三条件をもつことは]あるから。[証相が]二条件をもつ[場合]のように<sup>(23)</sup>。」さ

(18)チャールヴァーカー派の「推理は正しい認識手段ではない」という主張は、サーンキヤ学派の立てる推論式に対する批判を前提としている。サーンキヤ学派は、SKにおいて「プルシャは存在する。集積したものは他のためのものであるから」という内容の論証を行っている。

SK 17: samghātaparārthatvāt triguṇādiviparyayād adhiṣṭhānāt /

puruṣo 'sti bhoktṛbhāvāt kaivalyārthapravṛttes ca //

(SKV 22,6-15, 服部 [1969b: 196f] の和訳も参照のこと)

サーンキヤ学派は、「集積したものである眼はプルシャによって用いられる」ということを論証しようとしたが、サーンキヤ学派にとって<他のためのもの>ではないはずのプルシャも集積したものであるから、プルシャ以外の他のためのものであることになる。それ故、結果的に<集積したものであること>が<他のためのものであること>を排斥することになる。チャールヴァーカー派の主張はこの点についてなされた。なお、Dignāga は、この種の証因を、九句因のうち viruddhahetu に包含させている。(PSV ad PS 3.22cd)

上記のサーンキヤ学派、パールハスパティヤ派、仏教徒の間の論争の詳細については、生井 [1996: 136ff; 446ff] を参照のこと。

(19)cf. KUNST[1939: 85]: “denn er tritt auch in Formulierungen auf, die keine Schlüsse sind.”

(20)tshul gsum med pas T for trairūpyam

(21)'dir ... kyang ... ma yin te T for na ca

(22)ananumāne JK (cf. rjes su dpag pa ma yin pa) : anumāne S

(23)dvairūpyavat K (tshul gnyis pa bzhin no) : rūpyavat JS

らにまた、あらゆる論証において推理との矛盾が起こりうる。例えば<sup>(24)</sup>、[推論式:]「[論証しよう] 意図される所証属性は<sup>(25)</sup>、[論証の] 主題の限定要素となることはない。これ (= 論証されるべきもの) の集合体の一部であるから。[論証の] 主題それ自体のように」[といった例を挙げることができる]。これ故<sup>(26)</sup>、実にあらゆる推理は推理でないものとされる<sup>(27)</sup>。

また、推理が行われる<sup>(28)</sup>あらゆる場合に、特定の性質と矛盾する諸々の [証因という過失] が起こりうる。例えば、「音声は無常である。作られたものであるから。つぼのように」という [推理が] なされるとき<sup>(29)</sup>、ある者は特定の性質との矛盾を指摘するかもしれない。[すなわち]「この証因は、[音声]が 無常であることを論証するのと同様に、[音声]が 虚空の特質ではないことも [論証する]」云々というように。

またあらゆる場合に、二律背反 [を導く証因という過失] も起こりうる。例えば、「音声は無常である。作られたものであるから。つぼのように」という [推理が] なされるとき<sup>(30)</sup>、ある者は、二律背反 [を導く証因] を述べる。「音声は恒常である。聞こえるものであるから。音声性のように」と。以上のような実例についての多様な議論 (udāharaṇaprapaṅca) は、*Tattvaṭīkā*<sup>(31)</sup>において見られるべきである。(1457-1458)

## 8. Bhartṛhari による推理批判

(J168b6; K426,15; S521,16; Kunst(T) 200,6 [D36b3; P66b6])

[バールハスパティヤ派と] 同様に Bhartṛhari は [以下のような反論を] 述べる。

(J73b5; D53b5; P65b2)

状態・場所・時間の<sup>(32)</sup>ちがいから、諸々の [事物の] 能力が [それぞれ] 異なる場合、推理によって [それら] 諸々の事物を確立することは極めて困難である。<sup>(33)</sup>

<sup>(24)</sup>tadyathā n.e. T

<sup>(25)</sup>vivakṣitaḥ sādhyadharmo J (TSP 525,16, cf. brjod par 'dod pa'i bsgrub bya'i chos ni) : vivakṣita-sādhyadharmo KS

<sup>(26)</sup>'di ni T for anena

<sup>(27)</sup>rjes su dpag ma yin par bsgrub pa yin no T for niranumānīkṛtam

<sup>(28)</sup>kṛte n.e. T

<sup>(29)</sup>sbyor ba la T for kṛte

<sup>(30)</sup>sbyor ba la T for kṛte

<sup>(31)</sup>*Tattvaṭīkā* という書名は、TSP 529,13 ad TS 1484 においても確認され、そこでは Aviddhakarṇa という人物名と共に言及されている。詳しくは、TSP ad TS 1484 に対する脚注 (218) を参照のこと。

<sup>(32)</sup>yul dang dus dang gnas skabs kyi T for avasthādeśakālānām

<sup>(33)</sup>畝部 [1994: 6], [1998: 114], 赤松 [1998: 87] の和訳, RAU[2002: 9] の独訳も参照のこと。なおこの偈は一部が改変され、TS 1475 で批判される。

cf. TS 1475: avasthādeśakālānām bhedād bhinnāsu śaktiṣu /

bhāvānām anumānena nātaḥ siddhiḥ sudurlabhā //



avasthādeśakālānām bhedād bhinnāsu śaktiṣu /  
bhāvānām anumānena prasiddhir atidurlabhā //TS 1459//<sup>(34)</sup>

状態・場所・時間の<sup>(35)</sup>ちがいによって、諸々の事物の能力は[それぞれ]異なる。これ故、推理にもとづいてそれら(=諸々の能力)の存在は確定<sup>(36)</sup>されえない。というのも、推理にもとづいて、以下のように認識することは<sup>(37)</sup>できないからである。「デーヴァダッタは、重荷を運ぶ能力をもたない。デーヴァダッタであるから。幼い頃の状態のデーヴァダッタのように」という[ように]。というのも、この[推理]においては、[デーヴァダッタの幼い頃と現在の]状態のちがいによって能力のちがいがありうるため、逸脱が起こるからである。同様に、場所のちがいによって、アーマラキー樹(āmalakī)やカルジュラ樹(kharjūra)等[の実]について<sup>(38)</sup>、味・効能(vīrya)・成熟のちがいが見られるが、その場合<sup>(39)</sup>、以下のように[推理]することはできない。「全てのアーマラキー樹は渋い実をもつ。現在味わわれているアーマラキー樹[の実]のように<sup>(40)</sup>」という[ように]。同様に、時間のちがいによって<sup>(41)</sup>、井戸の水等には冷たい・温かい等の<sup>(42)</sup>ちがいがありうる。その場合、全ての水が冷たいと確定することはできない。<sup>(43)</sup> 以上のような[誤った推理の例が挙げられる]。[a 句の]「avasthādeśakālānām」という[句は後の]「bhedāt」という[語]にかかる第六格であり、[c 句の]「bhāvānām」という[語は][d 句の]「prasiddhir」にかかる[第六格である]<sup>(44)</sup>。(1459)

(J74a1; D53b6; P65b2)

それぞれの因果効力に関して、その能力がよく知られている事物であっても、特定の事物と

<sup>(34)</sup>Ce VP 1.32: avasthādeśakālānām bhedād bhinnāsu śaktiṣu /  
bhāvānām anumānena prasiddhir atidurlabhā //

なお、この偈は NM vol.1.108,27f にも引用される。

<sup>(35)</sup>yul dang dus dang gnas skabs kyi T for avasthādeśakālānām

<sup>(36)</sup>rjes su dpag pa'i khongs su 'du bar nges par bya T for anumānāt tadbhāvaniścayaḥ

<sup>(37)</sup>nges par T for pratyetum

<sup>(38)</sup>yung ba la sogs pa rnam kyi T for kharjūrādīnām

<sup>(39)</sup>gnas de la T for tatra

<sup>(40)</sup>anubhūyamānāmālakīvad JK (zos ba'i skyu ru ra bzhin T) : anudūyamānāmālakīvad S

<sup>(41)</sup>nus kyi bye brag gis T for kālabhedena

<sup>(42)</sup>ādi- n.e. T

<sup>(43)</sup>cf. VP (*Vṛtti*) 1.89,4: kālabhedād api, grīṣmahemantādiṣu kūpajalādīnām atyantabhinnāḥ sparsādayo dṛśyante. (訳は畝部 [1994: 7], 赤松 [1998: 88] を参照のこと)

<sup>(44)</sup>-apekṣā JS : -apekṣayā K

結合する場合、その能力 [の発現] は妨害される<sup>(45)</sup>。<sup>(46)</sup>

nirjñātaśakter<sup>(47)</sup> dravyasya<sup>(48)</sup> tām tām arthakriyām prati /  
viśiṣṭadravyasambandhe sā śaktiḥ pratibadhyate //TS 1460//<sup>(49)</sup>  
(J74a2; D53b6; P65b3)

ある事柄が、優れた推理者たちによって、注意深く推理されたとしても、[その同じ事柄は]他のより熟達した人々によって全く別様に論証される。<sup>(50)</sup>

yatnenānumito 'py arthaḥ kuśalair anumātr̥bhiḥ /  
abhiyuktatarair anyair anyathavopapādyate<sup>(51)</sup> //1461//<sup>(52)</sup>

(J169a1; K427,2; S522,11; Kunst(T) 200,23 [D36b6; P67a3])

同様に、草等に対する燃焼能力が確定された火の、一群の雲に対するその [燃焼] 能力は否定される。<sup>(53)</sup> またその場合、以下のように推理することはできない。「一群の雲は火によって焼かれる。地 [の要素] から成るものであるから<sup>(54)</sup>。草等のように」と。同様に、ある人によって、あるあり方として<sup>(55)</sup> 確立された事柄が、再び他のより熟達した人々によって別様に確立される。以上のことから、[推理には] 確実性がない<sup>(56)</sup>。(1460-1461)

<sup>(45)</sup>cf. KUNST[1939: 88]: "... [dann kommt es doch vor], daß sich diese Potenz in Verbindung mit bestimmten Substanzen abweichend von der [bekanntem] Wirkungsweise verhält."

<sup>(46)</sup> 畝部 [1994: 7], 赤松 [1998: 88f] の和訳, RAU[2002: 9] の独訳も参照のこと。

<sup>(47)</sup>nirjñātaśakter Kunst/S/VP : vijñātaśakter K : vijñānaśakter J

<sup>(48)</sup>dravyasya Kunst/VP (cf. dngos po rnam ni T) : apy asya JKS

<sup>(49)</sup>Ce VP 1.33: nirjñātaśakter dravyasya tām tām arthakriyām prati /  
viśiṣṭadravyasambandhe sā śaktiḥ pratibadhyate //

<sup>(50)</sup> 畝部 [1994: 8], [1998: 114], 赤松 [1998: 89-92] の和訳, RAU[2002: 9] の独訳も参照のこと。なおこの偈は一部が改変され, TS 1476 において批判される

cf. TS 1476: yatnenānumito 'py arthaḥ kuśalair anumātr̥bhiḥ /  
nānyathā sādhyate so 'nyair abhiyuktatarair api //

<sup>(51)</sup>upapādyate KS/VP (sgrub par byed T) : upapadyate J

<sup>(52)</sup>Ce VP 1.34: yatnenānumito 'py arthaḥ kuśalair anumātr̥bhiḥ /  
abhiyuktatarair anyair anyathavopapādyate // (NM vol.1.109,28f にも引用される)

<sup>(53)</sup>cf. VP(*Vṛtti*) 1.90,3f: agnyādīnām kāṣṭhādivikārotpādane dṛṣṭasāmarthyānām abhrapaṭalādiṣu dravyeṣu tathāvidhaṃ sāmartyaṃ pratibadhyate. (訳は畝部 [1994: 7], 赤松 [1998: 89] を参照のこと)

<sup>(54)</sup>sa'i rang bzhin yin pa'i phyir T for pārthivatvāt

<sup>(55)</sup>don du T for anyathā

<sup>(56)</sup>aniṣṭhā J (mthar mthug pa med T) : aniṣṭā KS (cf. KUNST[1939: 89])

## 9. 「他者のための推理は正しい認識手段ではない」という他者の見解

(J74a2; D53b7; P65b4)

一方、他者のための推理は、話者にとっては繰り返しであるから、正しい認識手段ではない。  
<sup>(57)</sup> それ (=他者のための推理) によっては、彼 (=話者) 自身が [推理] 対象を認識することはない。

parārtham anumānaṃ tu na mānaṃ vaktrapekṣayā /  
 anuvādān na tenāsau svayam arthaṃ<sup>(58)</sup> prapadyate //TS 1462//

(J74a2; D53b7; P65b4)

聞き手にとっても、これ (=他者のための推理) は他でもなく自分のため [の推理] である [という方] が適当である。実に、聴覚 [を根拠とする認識] と視覚を根拠とする認識には、どのようなちがいがあのか。

śrotrvyapekṣayāpy etat svārtham evopapadyate /  
 śrotradarśanamūlāyāḥ ko viśeṣo hi saṃvidāḥ //TS 1463//

(J169a1; K427,16; S522,15; Kunst(T) 201,4 [D37a1; P67a5])

一方、他の者<sup>(59)</sup>が述べる。

<sup>(57)</sup>cf. KUNST[1939: 90]: “Der Schluß für Andere ist für den Sprechenden (=mit Rücksicht auf den Sprechenden) kein *pramāṇa*, denn er ist eine Wiederholung.”

<sup>(58)</sup>arthaṃ JK : artha S

<sup>(59)</sup>現在までのところ、この「他の者」を特定することはできていないが、PRETS[1992: 198f with n.18-23], 小林 [2007: 158] によって、以下の文献にも類似の主張が見られることが報告されている。特に NM においてはこの種の説を主張する者が「nītividaḥ」と呼ばれている。(cf. STEINKELLNER[1979: 22 with n.5])

NM vol.2.130,16-26: iha hi svayam avagatam artham anumānena parasmai pratipādayatā sādhanīyasyārthasya yāvati śabdasaṃmūhe siddhiḥ parisamāpyate tāvān prayoktavyaḥ, tam eva ca parārtham anumānam ācakṣate nītividaḥ.

nanu naiva parārtham anumānaṃ nāma kiṃcid asti, vaktrapekṣayā śrotrapekṣayā vā tadanupapatteḥ.

vaktrānvaṃyāi sa hy artho nedānīm anumīyate /  
 śrotauḥ svārthānumānaṃ tadvākyaṅvagatihetukam //  
 yathā pratyakṣato dhūmaṃ dṛṣṭvāgnim adhigacchati /  
 tathā tadīyād vacanād iti kasya parārthatā //  
 āgamas tv eṣa bhidyate kaścid arthopadeśakaḥ /  
 kaścit tat pratyayopāyanyāyamārgopadeśakaḥ //  
 iti.

NBhūṣ 273,2-5: tatra paropadeśānapekṣaṃ svārtham, tadapekṣaṃ ca parārtham iti. naivaṃ dvididhaṃ yuktam, svārthaparārthāsambhavāt. vaktrapekṣayānuvādaḥ śrotrapekṣayā tu svārtham eva. kaś cātra viśeṣaḥ pratyakṣeṇa vā anumānena vā śabdādena vā anugataṃ liṅgam iti. (NBhūṣ当該箇所の英訳および解説は、PRETS[1992: 198f]を参照のこと)

PVA 486,13f: tato yad uktam parārtham cānumānaṃ ceti vyāhatam, tathā hi pratipādyāpekṣayā svārtham

「他者のための推理は、話者にとっては繰り返しであるから、正しい認識手段ではない。  
(60) 一方、聞き手にとって [も]、[他者のための推理は] 他でもなく自分のため [の推理] である。実に、聴覚によってあるいは視覚によってその [推理] 対象を認識する場合<sup>(61)</sup>、[両者に] どのようなちがいがあのか<sup>(62)</sup>。<sup>(63)</sup> ちょうど、視覚器官が活動しているとき<他者のため [の推理] >と呼ばれることがないと同様に、聴覚器官が活動しているときも [ <他者のため [の推理] >と呼ばれる] べきではない」と。

「**darśana**」とは、「これによって見られる」ということから視覚器官のことであり、「**saṃvidah**」とは認識のことである。(1462-1463)

(J74a2; D54a1; P65b5)

[推論式 A:] 「聞き手にとって、言語表現は、他者のための推理ではない。[言語表現は] 聞き手の [心] 相続において [生じる] 認識の原因であるから、あるいは [対象を] 知らせるものであるから。

na parārthānumānatvaṃ vacasaḥ śrotrapekṣayā /  
śrotṣantānavijñānahetutvajñāpakatvataḥ //TS 1464//

(J74a3; D54a1; P65b6)

例えば、感覚器官のように。」また、[推論式 B:] 「[言語表現は] 直接推理対象を明示することはない。それ故、それ (=言語表現) は、そうではない (=他者のための推理ではない)。不可離関係という結合関係の認識のように<sup>(64)</sup>。」

yathendriyasya sākṣāc ca nānumeyaparakāśanam /  
tasmād asyāvīnābhāvasambandhajñānavan na tat //TS 1465//

(J169a2; K427,20; S522,20; Kunst(T) 201,12 [D37a3; P67a7])

同様に、[推論式 A:] 「聞き手にとって、言語表現は他者のための推理ではない。[言語表現は] 聞き手の [心] 相続において生じる知識の原因であるから、あるいは [対象を] 知らせるものであるから。例えば、感覚器官のように。」[śrotṣantānavijñānahetutvajñāpakatva という複合語は]

eva, pratipādakāpekṣayā tv anuvādamātrakam, tan nirākṛtam. (PVA 当該箇所和訳および解説は、小林 [2007: 158f with n.10] を参照のこと)

また、寺石 [1995: 36] によると、Sucaritamīśra は、*Ślokavārttikakāśikā* ad ŚV (anumāna) 53cd-54ab において、上記の主張と同様の観点から、仏教徒による推理の二区分を否定している。

<sup>(60)</sup>cf. KUNST[1939: 90]: “Die Schlußfolgerung für Andere (*parārtham anumānam*) ist kein *pramāṇa* für den Sprechenden, da sie [nur] eine Wiederholung (*anuvādatva*) desjenigen ist, was der Sprechende schon [vorher] erkannt hat.”

<sup>(61)</sup>veti Kunst (cf. 'am T) : ceti JKS

<sup>(62)</sup>'di la khyad par ci yod T for ko hi viśeṣaḥ

<sup>(63)</sup>cf. PVin(S) 2.45,3f(=PVin 2.1\*,4f) : aprthagvacanaṃ śabdasya viśeṣābhāvād iti cet.

<sup>(64)</sup>cf. KUNST[1939: 90]: “... so wie dies auch der Fall ist bei der auf Konkomitanzverbindung (Inferenz) beruhenden Erkenntnis.”

「śroṭṛsantānavijñānahetutva<sup>(65)</sup>」と「jñāpakatva」と[が並立する]Dvandva 複合語 [であり、この複合語]によって二つの証因が示されている。「例えば、感覚器官のように」という[ことによって]、喩例が示されている。

[また]以下のような別の推論式 [が立てられる]。[推論式 B:]「聞き手にとって、言語表現は他者のための推理ではない。直接推理対象を明示することはないから<sup>(66)</sup>。不可離関係という結合関係の認識のように。」「tasmād」というのは、直接推理対象を明示することはないから<sup>(67)</sup>ということである。直接推理対象を明示することはない<sup>(68)</sup>から、聞き手にとって言語表現は正しい認識手段ではない。不可離関係という結合関係の認識のように、というのが[この]文章 (= TS 1465)の意味である。[avinābhāvasambandhajñāna という複合語の説明:]「avinābhāva」とは所証と能証の[不可離関係のこと]であり、まさしくその同じものが、結合関係である。さらに、不可離関係という、ある証相の所証との結合関係<sup>(69)</sup>、そ[のような結合関係]の認識、というように分解される。(1464-1465)

(J74a3; D54a2; P65b6)

[反論:] 他者の活動に関係するという点で他者のための推理であると述べられる。[答論:] そのことはまた正しくない。自分のため [の推理] も [場合によっては] 他者のため [の推理] となる不都合が生じるからである。

athocyate parārthatvaṃ paravyāpṛṭṭy<sup>(70)</sup>-apekṣayā /  
tad apy ayuktaṃ svārthe 'pi parārthatvaprasaṅgataḥ //TS 1466//

(J169a4; K427,27; S523,9; Kunst(T) 202,3 [D37a6; P67b4])

[反論:] 他者の活動に関係するという点で、それ (=言語表現) は他者のため [の推理]<sup>(71)</sup>と述べられる。[答論:] そうであるとしても [そのことは] 正しくない。自分のため [の推理] も [場合によっては] 他者のため [の推理] となる不都合が生じるからである。なぜなら他者性 [自体] が相対的な [概念] だからである。例えば、彼岸・此岸 [という言葉] のように。(1466)

## 10. パールハスパティヤ派の見解に対する批判

### 10.1. 第一の推論式における証因が矛盾因であることの指摘

(J169a5; K428,3; S523,12; Kunst(T) 202,8 [D37a7; P67b5])

<sup>(65)</sup>-hetutvaṃ n.e. T

<sup>(66)</sup>gsal ba'i phyir T for aprakāśakatvāt

<sup>(67)</sup>gsal ba'i phyir T for aprakāśakatvāt

<sup>(68)</sup>bsal ba T for aprakāśakatvam

<sup>(69)</sup>avinābhāvo vā sambandhaḥ om. K

<sup>(70)</sup>-vyāpṛṭṭy JS (cf. TSP -vyāpāra) : -vyāvṛṭṭy Kunst/K (cf. log pa T)

<sup>(71)</sup>parārtham JS : parārtha K

[Śāntarakṣita は] 「trirūpaliṅga-」云々ということによって、[パールハスパティヤ派の見解 (= TS 1455-1458) を] 批判する。

(J74a4; D54a2; P65b7)

<三条件をもつ証相を前提とすること>とは、<整合性をもつ>という特徴のことではないのか<sup>(72)</sup>。また<[正しい] 認識手段であること>とは、そのような (=整合性をもつこと) という特徴である。そのこと (=三条件をもつ証相を前提とすること) によってどうしてそのこと (=自分のための推理が正しい認識手段であること) が否定されようか。<sup>(73)</sup>

trirūpaliṅgapūrvatvaṃ nanu saṃvādi<sup>(74)</sup>-lakṣaṇam /  
tallakṣaṇam ca mānatvaṃ tat kiṃ tasmān niṣidhyate //TS 1467//

その (=パールハスパティヤ派の見解の) 内、[Śāntarakṣita は] 第一の推論式<sup>(75)</sup>における<三条件をもつ証相を前提とすること>という証因が矛盾であることを指摘する。「整合性をもつという特徴」とは、<整合性をもつこと>ということであり、このことによって [正しい認識手段が] 特徴づけられるので [このようにいわれる]<sup>(76)</sup>。[と] というのも<sup>(77)</sup>、三条件をもつ証相から生まれた知識は間接的に実在と結合していることから、直接知覚と同様 [推理も] 整合性をもつのである。[Dharmakīrti も]、

「証相の認識と証相保持者の<sup>(78)</sup>認識は、それ (=実在) の顕現を欠いているとしても、そのように間接的に実在と結合しているので [実在に対して認識者を] 欺くことはない<sup>(79)</sup>

と述べているように。[c 句の] 「tallakṣaṇam ca」[のうち「そのような特徴」]とは、<整合性をもつこと>という特徴のことである。[Dharmakīrti も]、

「正しい認識手段とは、整合性をもつ知識である」<sup>(80)</sup>

<sup>(72)</sup>cf. 生井 [1996: 147].

<sup>(73)</sup>生井 [1996: 147f] の和訳も参照のこと。

<sup>(74)</sup>saṃvādi JKS : saṃvāda? (sic) Kunst

<sup>(75)</sup>「自分のための推理は、正しい認識手段ではない。三条件をもつ証相を前提としているから。[論証しようと望まれたことを排斥する証相によって生じる] 誤った知識のように。(TSP 520,18f ad TS 1456: svārthānumānaṃ pramāṇaṃ na bhavati, trirūpaliṅgapūrvatvān mithyājñānavat.)」という推論式を指す。

<sup>(76)</sup>cf. KUNST[1939: 93]: “saṃvādalakṣaṇa ist eine tatpuruṣa-Zusammensetzung und bedeutet: » Die Definition (=das Kenzeichen) der unwidersprochenen Erkenntnis «.”

<sup>(77)</sup>'di ltar T for yataḥ

<sup>(78)</sup>liṅgaliṅgidhiyor J/Kunst/K/PV (rtags can rtags blo dang T) : liṅgaliṅgadhior S

<sup>(79)</sup>Ce PV 3.82: liṅgaliṅgidhiyor evaṃ pāraparyeṇa vastuni /  
pratibandhāt tadābhāsaśūnyayor apy avañcanam //

戸崎 [1979: 154-157] の和訳と解説、生井 [1996: 148f] の和訳も参照のこと。

<sup>(80)</sup>Ce PV 2.1ab': pramāṇam avisamvādi jñānam.

と述べているように。実に、直接知覚についても、それ (= 直接知覚) が正しい認識手段であると主張する者は<sup>(81)</sup>、〈整合性をもつこと〉以外に、正しい認識手段を確立するための<sup>(82)</sup>別の<sup>(83)</sup>根拠を示すことはできない。そして、それ (= 整合性をもつこと) は、三条件をもつ証相から生じる [知識] にも存在する。従って、どうしてそのことによって、つまり〈整合性をもつこと〉の根拠である〈三条件をもつ証相を前提とすること〉にもとづいて<sup>(84)</sup>、[推理が] 〈正しい認識手段であること〉が否定されようか<sup>(85)</sup>。以上のことによって、含意から、[パールハスパティヤ派の立てる推論式における] 所証 (= 正しい認識手段ではないこと) と能証 (= 三条件をもつ証相を前提とすること) 間の相反が述べられた [ことになる]。すなわち、〈三条件をもつ証相を前提とすること〉がある場合には、〈整合性をもつこと〉があり、〈整合性をもつこと〉がある場合には〈正しい認識手段であること〉がある。また、〈正しい認識手段であること〉と〈正しい認識手段でないこと〉には、相互に排斥することによって確立されることを特徴とする相反がある<sup>(86)</sup>。従って、論理的帰結として (sāmarthyāt), [パールハスパティヤ派の提出する推論式における〈三条件をもつ証相を前提とすること〉という] 証因は矛盾 [因] であることが示された。<sup>(87)</sup> (1467)

## 10.2. 喩例の不備の指摘と第二の推論式に対する批判

(J169b1; K428,17; S524,7; Kunst(T) 203,8 [D37b5; P68a4])

「mithyājñānam」云々ということによって、[Śāntarakṣita は] 喩例<sup>(88)</sup>が所証を欠いていることを指摘する。

(J74a4; D54a3; P65b8)

[論証しよう] 望まれたことを排斥する [証相] によって生じる知識が、誤った知識 [と] 等しいと述べられたのは、実在にもとづいてではなく、[サーンキヤ学派による] 前主張に依存してのことである。

<sup>(81)</sup>cf. KUNST[1939: 93]: “Selbst derjenige, welcher, [wie die Cārvakas (sic), nur] in der Wahrnehmung das Wesen des *pramāṇa* sieht, ...”

<sup>(82)</sup>-vyavasthā- KS (rnam par bzhag pa'i T) : -avyavasthā- J

<sup>(83)</sup>anyat n.e. T

<sup>(84)</sup>cf. T: tshul gsum pa'i rtags sngon du 'gro ba can de nyid las mi bslu ba'i rgyu ...

<sup>(85)</sup>cf. KUNST[1939: 93f]: “weshalb bestreitet also der Gegner das *prāmāṇya* des Schlusses unter Berufung auf den Umstand, daß er (der Schluß) das *trirūpahetutva* zur Voraussetzung hat, [obwohl eben dieser Umstand] die Ursache des Unwidersprochenseins [der durch die Inferenz gewonnenen Erkenntnis] ist?”

<sup>(86)</sup>cf. NB 3.72-75: *dvidvidho hi padārthānām virodhaḥ ... parasparaparihārasthitalakṣaṇatayā vā bhāvābhāvat.*

<sup>(87)</sup>生井 [1996: 148f] の解説も参照のこと。

<sup>(88)</sup>上からの議論の続きで、「自分のための推理は、正しい認識手段ではない。三条件をもつ証相を前提としているから。[論証しよう]と望まれたことを排斥する証相によって生じる] 誤った知識のように」という推論式中の〈 [論証しよう]と望まれたことを排斥する証相によって生じる] 誤った知識〉という喩例を指す。

mithyājñānaṃ samānaṃ ca pūrvapakṣavyapekṣayā /  
iṣṭaghātakṛtā<sup>(89)</sup> janyaṃ jñānaṃ uktaṃ na vastunaḥ //TS 1468//  
(J74a5; D54a3; P65b8)

というのも、実在に立脚することによって、そのような知識 (= 推理知)<sup>(90)</sup> は整合性をもつと決定されるからである。まさにこれ故、[そのような知識が] 立論者によって [論証しようと] 望まれたものとは反対のもの [であっても]、それ (= そのような知識) は正しい認識手段である。

vastuṣṭhityā hi tajjñānaṃ avisaṃvādi niścitam /  
vādīṣṭaviparītasya pramāṇam ata eva tat //TS 1469//  
(J74a5; D54a4; P66a1)

これ故、[パールハスパティヤ派の立てる第一の推論式における] 証因は矛盾である<sup>(91)</sup>。また、喩例にも所証が欠如している。まさしくこの同じ方法によって、第二 [の推論式]<sup>(92)</sup> において証因は不成立となる。

ato viruddhatā hetor dṛṣṭānte cāpy asādhyatā<sup>(93)</sup> /  
etenaiva prakāreṇa dvitīye hetvasiddhatā //TS 1470//

それ (= 推理知) は、立論者によって [論証しようと] 望まれたこととは反対のこと [を論証する] 能証にもとづいて [得られた] としても、まさしく正しい認識手段である。というのも、さもなくば<sup>(94)</sup>、もし [立論者自身が論証しようと望んだ所証とは] 別の所証に関して、あらゆる [証因] はあらゆる場合に正しい認識手段ではないと確立される場合、直接知覚についても [それが正しい認識手段ではないという] 不都合となるであろうからである。一方それ (= 推理知) は、[サーンキヤ学派による] 前主張に依存して、誤った知識と述べられたのであって、**実在に立脚することによって**[そのように述べられたの] ではない。[「pūrvapakṣavyapekṣā」という複合語は]、**前主張**、すなわち**以前の**つまり**最初の立論者の主張**、それに**依存すること**と分解される。すなわち、

(89)-kṛtā J/Kunst/K : -kṛtāj S

(90)「そのような知識」とは推理知のことであるが、正確には、TSP 524,21f: yad avisaṃvādi tat pramāṇam yathā pratyakṣam, saṃvādi ca trirūpaliṅgajanyaṃ jñānaṃ iti svabhāvaheṭuḥ. より「三条件をもつ証相から生じる知識」のことである。直接的には直前の「iṣṭaghātakṛtā janyaṃ jñānaṃ」を受けているが、これは同じものを立論者 (= パールハスパティヤ派) の立場から表現したものである。(cf. KUNST[1939: 95]: “diese Erkenntnis [=iṣṭaghātakṛtā janyaṃ jñānaṃ]”)

(91)この結論はすでに Kamalaśīla が先取りし、詳説している。

TSP 523,22ff ad TS 1467: etena sādhyasādhanayor arthato virodha uktaḥ. tathā hi yatra trirūpaliṅgapūrvatvaṃ tatrāvisaṃvāditvaṃ, yatrāvisaṃvāditvaṃ tatra prāmāṇyam, prāmāṇyāprāmāṇyayoś ca parasparaparihāraṣṭhitalakṣaṇo virodha iti sāmartyād viruddho hetur nirdiṣṭaḥ.

(92)パールハスパティヤ派の立てる第二の推論式: 「証相が三条件をもつことは、推理知の原因ではない。[正しい] 推理ではない場合でも [三条件をもつことは] あるから。[証因が] 二条件をもつ [場合] のように」。(TSP 520,21 ad TS 1457-1458: na ca trairūpyam anumitikāraṇam, ananumāne 'pi bhāvād dvairūpyavat.)」を指す。

(93)asādhyatā KS (cf. bsgrub bya nyid med pa'i T) : asiddhatā J

(94)'di ltar T for anyathā hi



眼等が [それ以上] 特性が付加されることのない単一の他者のためのものであることを<sup>(95)</sup><sup>(96)</sup> [論証しよう] 望む [サーンキヤ学派の] ある者、そのような者の意図に依存して [結果としての推理知が] 誤った知識であると述べられる。[仏教徒にとって]、眼等は、無常で単一ではない認識等の原因として確立されるからである。「[パールハスパティヤ派の提出する<三条件をもつ証相を前提とすること>という証因が] 矛盾である」というのは、<三条件をもつ証相を前提とすること>が、正しい認識手段でないような<sup>(97)</sup> どんなもの (=同類群) にも存在しないからである。むしろ反対に、[<三条件をもつ証相を前提とすること>は、立論者によって論証しよう] 望まれたものを排斥する [証相] によって<sup>(98)</sup> 生じる<sup>(99)</sup> 知識である [としても] 正しい認識手段であるようなもの (=異類群) においてのみ存在するからである。

(J169b2; K429,3; S524,14; Kunst(T) 204,1 [D38a1; P68b1])

[反論:] また、ローカーヤタ派に対して、反対の [ことを論証する] 能証が [仏教徒によって提示] される場合、喩例は成立しえないのではないか。というのも、対論者 (=ローカーヤタ派) は、[喩例である] < [論証しよう] 望まれたものを排斥する [証相] から生じる知識<sup>(100)</sup> > が正しい認識手段であることを認めないからである。さらに、[論争する両者の] 一方にとって成立しないものは [正しい] 喩例ではない。[Dignāga によっても]

「一方、[論争する] 両者によって確定されたことを表示するもの<sup>(101)</sup>のみが、論証 [あるいは] 論駁 [と呼ばれる]<sup>(102)</sup>」<sup>(103)</sup>

という [論争の] 規則<sup>(104)</sup> が述べられている。

[答論:] この場合、たとえ対論者 (=ローカーヤタ派) が、[<論証しよう] 望まれたものを排斥する証相から生じる知識> が < 正しい認識手段であること > を表現上認めなかったとしても、[そのことと同内容の<三条件をもつ証相から生みだされる知識>が] < 整合性をもつこと > は否定されえないから、[それが正しい認識手段であることは] やはり認められうる。それ (=整合性

<sup>(95)</sup>-parārthatvaṃ JS (cf. don byed pa nyid) : -parā(dā?)rthatvaṃ (sic) K

<sup>(96)</sup>bogs dbyung du med pa gcig don byed pa nyid du T for anādheyātīśayaikapārthatvaṃ  
cf. KUNST[1939: 95]: "... daß der Gesichtssinn und die anderen Sinnesorgane etwas anderem, das ewig und eins ist [also dem *puruṣa*], dienen ..."

<sup>(97)</sup>tshad ma yin pa T for apramāṇe

<sup>(98)</sup>kṛtā K : -kṛtāj S : kṛjjane (sic) J

<sup>(99)</sup>janye n.e. T

<sup>(100)</sup>jñānaṃ n.e. T

<sup>(101)</sup>rgol ba gnyis ka la nges pa T for ubhayaniścītavācī

<sup>(102)</sup>sādhanaṃ dūṣaṇaṃ J/PVSV (cf. sgrub pa dang sun 'byin pa yin no T) : sādhanadūṣaṇaṃ KS

<sup>(103)</sup>Cee NMukh (桂 [1977: 125]): 唯有共許決定言詞説名能立或名能破。(= PVSV 153,19f: ya eva tūbhayaniścītavācī sa eva sādhanam dūṣaṇam vā. PVSV 13,17 にも部分的に引用される。) このバツページ前後の NMukh のテキスト・訳・解説については桂 [1977: 125f] を参照のこと。

<sup>(104)</sup>nyāya JS : nyāya(yāt?) (sic) K (cf. rigs pas so T)

をもつこと)を認める人は、論理的必然として<sup>(105)</sup>、[三条件をもつ証相から生じる知識が]<sup>(106)</sup><正しい認識手段であること>もまた**實在に立脚することによって**[決定される]と認めるべきである。従って、対論者が承認することに従うことによって<sup>(107)</sup>ではなく、[推理が]實在の力により生じ働くことによって<sup>(108)(109)</sup>矛盾は指摘される。あるいは、矛盾の証因であることを示すことによって、[その証因は]矛盾となる<sup>(110)</sup>。その場合 [パールハスパティヤ派のいう]証因は矛盾であること [を以下に示す]。[推論式:]「[遍充関係:] 整合性をもつもの、それは正しい認識手段である。例えば、直接知覚のように。[主題所属性:] そして、三条件をもつ証相から生じる知識は整合性をもつ。」以上は、本質としての証因 [による推論式] である。また [この証因は不成立でも] ない。不成立であるなら [証因が] それ自体 [としての所証] も原因 [としての所証] ももたないという<sup>(111)(112)</sup>不都合となるから。また [不確定である場合]、直接知覚が正しい認識手段ではないという不都合となるので、不確定でもない<sup>(113)</sup>。

「asādhyatā (TS 1470b)」とは、これ (= 喩例) に所証が存在しないから**所証が欠如して**おり、そのような状態が、「**所証が欠如していること**」[といわれる]。それは、所証を欠いているということである。「**第二 [の推論式] において**」とは、「na ca traīrūpyam<sup>(114)</sup>」云々<sup>(115)</sup>において<sup>(116)</sup>ということであり、「**証因が不成立となる (TS 1470d)**」というのは、[第二の推論式における証因<三条件をもつこと>は正しい] 推理でないものには決して存在しないからである。「ま

<sup>(105)</sup>cf. KUNST[1939: 96]: “stillschweigend (sāmarthyāt)”.

<sup>(106)</sup>de'i add. T

<sup>(107)</sup>parābhyupagamānurodhena JK : parābhyupagamanānurodhena S

<sup>(108)</sup>-pravṛtṭyā Kunst (-pravṛtṭyāt J, cf. zhugs pas T) : -prakṛtyā S : prakṛtya K

<sup>(109)</sup>cf. HBTĀ 324,25: **vastuṣṭhityaiva** (=HBṬ 77,7) vastuvṛtṭyai na paropagamabalenety arthāt.

<sup>(110)</sup>cf. KUNST[1939: 96]: “Oder aber [kann man sagen]: Das Wort *viruddha* bezieht sich auf einen *viruddha-hetu* ...”

<sup>(111)</sup>niḥsvabhāvatvanirhetutva- J/Kunst/S (rang bzhin med pa dang rgyu med pa nyid du T) : niḥsvabhāvatvānirhetutva- K

<sup>(112)</sup>cf. KUNST[1939: 97]: “... daß [*prāmāṇya* mit der unwidersprochenen Erkenntnis] nicht wesensidentisch und somit kein *hetu* [für das *avisamvādi jñānam*] ist.”

<sup>(113)</sup>nānaikāntikaḥ JS (ma nges pa yang ma yin no T) : naikāntikaḥ K

<sup>(114)</sup>na ca traīrūpyam em. (TSP 520,21) : na ca traīrūpya JKS : tac ca traīrūpyam Kunst

<sup>(115)</sup>TSP 520,21 ad TS 1457-1458: na ca traīrūpyam anumitikāraṇam, anaumāne 'pi bhāvād dvairūpyavat. を指す。

KUNST[1939: 97, n.3] は、この部分のチベット訳に否定辞がない (rtags kyi tshul gsum tshul gnyis bzhin T) ことから、「tac ca traīrūpyam」と訂正しているが、文脈上パールハスパティヤ派による第二の推論式を指すことが明らかであるため上記の通り再訂正した。

<sup>(116)</sup>rtags kyi tshul gsum tshul gnyis bzhin zhes bya ba la sogs pa T for na ca traīrūpyam ityāda

さしくこの同じ [方法] によって (TS 1470c)」というの<sup>(117)</sup>、「trirūpaliṅga-」云々<sup>(118)</sup>という<sup>(119)</sup>論理によって、ということである。<sup>(120)</sup> (1468-1470)

### 10.3. TS 1458 に対する答論

(J169b5; K429,15; S525,12; Kunst(T) 205,4 [D38a7; P69a1])

[Śāntaraksita は] 「**anumānavirodhasya**」云々 (= TS 1458) に対して反論を述べる。「yat tādātmya-」云々と。

(J74b1; D54a4; P66a2)

論理学者たちは、同一性あるいは因果関係によるものとして確定された結合関係のみが立証のための能証であると述べる。

yat tādātmyatadutpattyā sambandhaṃ pariniścitam /  
tad eva sādhanam prāhuḥ siddhaye nyāyavādinaḥ //TS 1471//

(J74b2; D54a5; P66a2)

そのような能証においては、推理との矛盾等は存在しない。というのも、それ (= 能証) は、それ自体または [その] 原因 [としての所証] なしにはいかなる場合にもありえないからである。

anumānavirodhādir īdrśy asti<sup>(121)</sup> na sādhanē /  
naiva tad dhy ātmahetubhyāṃ vinā sambhavati kvacit //TS 1472//

(J74b2; D54a5; P66a3)

また、相互に相反する二つの属性がある一つの実在において [存在する] というのは正しくない。これ故、二律背反 [を導く証因] はありえない。

parasparaviruddhau ca dharmāu naikatra vastuni /  
yujyete sambhavo nāto viruddhāvyabhicāriṇaḥ //TS 1473//

「そのような [能証] においては」というのは<sup>(122)</sup>、同一性あるいは因果関係によって [所証と] 結合された [能証] においてということである。「**ātmahetubhyāṃ**」とは、[能証] それ自体または [能証の] 原因 [としての所証という意味で、それら] なしには、順次それぞれ [に対応する] 証相 [も] 存在しない。[能証が所証] それ自体でもなく [その] 原因ももたないという不都合となるからである。「[論証しよう] 意図される所証属性は、[論証の] 主題の限定要素ではない<sup>(123)</sup>」と述

<sup>(117)</sup>cf. rnam pa 'di gnyis kyis zhes bya ba T

<sup>(118)</sup>TS 1467 を指す。

<sup>(119)</sup>trirūpaliṅgetyādinā JK : trirūpaliṅgasyetyādinā S

<sup>(120)</sup>TS 1467-1470 およびそれに対する TSP の内容については、生井 [1996: 446-454] に概説がある。

<sup>(121)</sup>īdrśy asti J : īdrśe 'sti Kunst/KS

<sup>(122)</sup>īdrśīti J/TS 1472b : īdrśa iti KS

<sup>(123)</sup>TSP 520,22f ad TS 1457-1458: vivakṣitaḥ sādhyadharmo dharmiviśeṣaṇam na bhavati.

これは推論式の一部をなすが、その全体は以下の通りである。「[論証しよう] 意図される所証属性は、[論証の] 主題の

べられたことに関して、もし所証属性が [論証の] 主題の限定要素でなければ、集合体といったものは存在しない。それ故また<sup>(124)</sup>、<それ (= 論証されるべきもの) の<sup>(125)</sup>集合体の一部であるから<sup>(126)</sup>>という証因は不成立となるだろう。また、「推理 [が行われる] あらゆる場合において、特定の性質と矛盾する諸々の [証因という過失] が起こりうる<sup>(127)</sup>」<sup>(128)</sup>と述べられたが、そのことは正しくない。なぜなら、[ある証因は] 所証とは反対のものを論証するものであるという理由で矛盾 [因] であると認められるからである。また、特定の性質が論証しようと望まれることはないからである<sup>(129)</sup>。実在の力によって生じ働く推理の [適用] 範囲においては<sup>(130)</sup>、**二律背反 [を導く証因]** もまたありえない。ある一つの基体に**相互に相反する二つの属性**<sup>(131)</sup> [が存在する] という不都合となるからである。(1472-1473)

## 11. Bhartṛhari の見解に対する批判

(J169b7; K430,3; S525,23; Kunst(T) 205,23 [D38b4; P69a6])

[Bhartṛhari によって] 「**avasthādeśakālānām**」云々<sup>(132)</sup>と述べられたが、そのことに対して [Śāntarakṣita は] 「**abhyasta-**」云々 [と述べる]。

(J74b3; D54a6; P66a4)

また、その特徴 [の識別] に習熟している人々が正しい証相を確定する際に推理が生じ働く。[それ以外の] 他のものが推理と呼ばれることはない。

**abhyastalakṣaṇānām ca samyaglingaviniścaye /  
anumā<sup>(133)</sup>-vṛttir anyā tu nānumety abhidhīyate //TS 1474//**

正しく確定された証相が知らせるものであると認められるのであって、疑わしいものは [知ら

---

限定要素となることはない。これ (= 論証されるべきもの) の集合体の一部であるから。ちょうど [論証の] 主題の本質のように。」

<sup>(124)</sup>de lta yin dang T for tatas ca

<sup>(125)</sup>etat- n.e. T

<sup>(126)</sup>TSP 520,23 ad TS 1457-1458: etatsamudāyaikadeśatvāt.

<sup>(127)</sup>cf. KUNST[1939: 98f]: “... daß für jeden Beweis ein widersprechender *hetu*, der verschiedene Prädikationen beweist, möglich sei.”

<sup>(128)</sup>TSP 521,10 ad TS 1457-1458: sarvatra cānumāne kṛte viśeṣaviruddhānām sambhavaḥ.

<sup>(129)</sup>cf. KUNST[1939: 99]: “Es handelt sich aber keineswegs um das Beweisen irgendeiner anderen Kennzeichnung (*viśeṣaḥ sādhayitum iṣṭaḥ=anyasādhyadharmā*).”

<sup>(130)</sup>-anumānaviśaye J/Kunst (cf. rjes su dpag pa'i yul ni T) : -anumāne viśaye KS

<sup>(131)</sup>-viruddhadharma- JK : -virudharma- (sic) S

<sup>(132)</sup>TS 1459 (=VP 1.32), 1460 (=VP 1.33), 1461 (=VP 1.34) を指す。

<sup>(133)</sup>anumā- KS : anumāna- J

せるものであると認められ]ない。というのも、蒸気等の<sup>(134)</sup>色かたちによって、[煙の存在が]疑われるとき [その] 煙は火 [の存在] を確定するものではないからである。[問:] いかにして他ならぬ証相が確定されるのか。[答:] 習熟 (abhyāsa) によってである。ちょうど、それ (= 宝石の色かたち等) に精通している人々には<sup>(135)</sup>、宝石の色かたち等に関する [識別能力が備わっている] ように、それら (= 蒸気や煙等) 自身の特徴 [の識別] に習熟している人々は、蒸気等から煙等を識別する [ことができる]。<sup>(136)</sup> それ故、[煙等の証相を] 識別した後に<sup>(137)</sup> [推理に関わる] 活動に従事するこれらの人々は<sup>(138)</sup> また、火 [の認識] に到達しうるのである。<sup>(139)</sup> (1474)

(J74b3; D54a6; P66a5)

状態・場所・時間のちがいから、諸々の [事物の] 能力が [それぞれ] 異なる場合、推理によって [それら] 諸々の事物を確立することは、これ故、極めて困難なわけではない。<sup>(140)</sup>

avasthādeśakālānām bhedād bhinnāsu śaktiṣu /

bhāvānām anumānena nātaḥ siddhiḥ sudurlabhā //TS 1475//<sup>(141)</sup>

(J74b4; D54a7; P66a5)

優れた推理者たちによって、注意深く推理されたある事柄はまた、他のより熟達した人々によって別様に論証されることはない。<sup>(142)</sup>

yatnenānumito 'py arthaḥ kuśalair anumātr̥bhiḥ /

nānyathā sādhyate so 'nyair abhiyuktatarair api //TS 1476//<sup>(143)</sup>

<sup>(134)</sup>vāṣpādi- JS : bāṣpādi- K

<sup>(135)</sup>rigs pa T for tadvidām

<sup>(136)</sup>cf. T: 'di ltar goms pa ni du ba la sogs pa de'i mtshan nyid[nyid du CD] rlangs pa la sogs pa dag las rnam par 'byed pa nyid yin no //

<sup>(137)</sup>tataḥ pravivecyā JS (de'i phyir shin tu rnam par phye nas T) : a(tha) vivecyā K : ato vivecyā Kunst

<sup>(138)</sup>cf. KUNST[1939: 100]: "... sie als Sachverständige (*pravṛttāḥ*) ..."

<sup>(139)</sup>このパラグラフの最後の一文について、K, S 共にこれを次の TS 1475 に対する注釈の一部と見なしているが、文脈より、KUNST[1939: 100] の通り TS 1474 の注釈の一部と考える方が自然である。

<sup>(140)</sup>畝部 [1998: 116] の和訳も参照のこと。

<sup>(141)</sup>この偈について注目すべきは、Śāntarakṣita が、Bhartṛhari からの反論である TS 1459(=VP 1.32) の d 句のみを書き換えることによって答論としている点である。

cf. TS 1459:

avasthādeśakālānām bhedād bhinnāsu śaktiṣu /

bhāvānām anumānena prasiddhir atidurlabhā //

<sup>(142)</sup>畝部 [1998: 116] の和訳も参照のこと。

<sup>(143)</sup>上と同様、TS 1461(=VP 1.34) の d 句が書き換えられて答論とされている。

cf. TS 1461:

yatnenānumito 'py arthaḥ kuśalair anumātr̥bhiḥ /

abhiyuktatarair anyair anyathāivopapādyate //

(J170a1; K430,13; S526,8; Kunst(T) 206,9 [D38b7; P69b1])

それ故、正しく識別された証相は、[所証から] 逸脱することはないので、状態等のちがいに  
よって[その能力が]異なる[諸々の事物]を確立することは、極めて困難なわけではない。また  
正しく識別された証相によって確定された事柄が、別様に[論証]されることはありえない。すな  
わち、正しく確定された煙によって推理された火が、[それとは]別様の存在として<sup>(144)</sup>[新たに論  
証]されることはありえない。ある一つのものに、二つの相反する本質[が存在すること]は正し  
くないからである。また、「デーヴァダッタは、重荷を運ぶ能力をもたない<sup>(145)</sup>」云々<sup>(146)</sup>、ま  
た「一群の雲は、火によって焼かれる<sup>(147)(148)</sup>」[云々]<sup>(149)</sup>と述べられる場合の[証相]<sup>(150)</sup>は決し  
て[正しい]証相ではない。三条件を備えていないから<sup>(151)</sup>。というのも、単に見ないことによ  
って、証因が異類群から排除されることは<sup>(152)</sup>ありえないからである。[Dharmakīrti は]以下のよ  
うにいう。

「また、単に見ないことによって、異類群において[証因が]否定的随伴関係をもつことはな  
い<sup>(153)</sup>」<sup>(154)</sup>

と。それではどうなのかといえ、[証因と所証の関係性が]同一性あるいは因果関係という[二  
種の]結合関係に限定されることによって、不可離関係[も二種に]限定されるのである<sup>(155)</sup>。  
[Dharmakīrti は]以下のように述べる。

また、cf. NM vol.1.113,4f:

yatnenānumito yo 'rthaḥ kuśalair anumātr̥bhiḥ /  
abhiyogaśatenāpi so 'nyathā nopapadyate //

敵部 [1998: 116f] も参照のこと。

<sup>(144)</sup>rnam pa gzhan gyis ngo bo T for anyathābhāvah

<sup>(145)</sup>TSP 521,18f ad TS 1459: devadatto bhārodvahanasamartho na bhavati.

<sup>(146)</sup>推論式の全体は以下の通り：「デーヴァダッタは、重荷を運ぶ能力をもたない。デーヴァダッタであるから。幼い頃  
の状態のデーヴァダッタのように。」

<sup>(147)</sup>mes thig pa ma yin no T for vahninā dahyate

<sup>(148)</sup>TSP 522,12 ad TS 1460-1461: abhrapaṭalam agninā dahyate.

<sup>(149)</sup>推論式の全体は以下の通り：「一群の雲は火によって焼かれる。地[の要素]から成るものであるから。草等のよ  
うに。」

<sup>(150)</sup>つまり、<デーヴァダッタであるから>および<地[の要素]から成るものであるから>という証相を指す。

<sup>(151)</sup>de la tshul gsum nyid med pa'i phyir ro T trairūpyābhāvāt

<sup>(152)</sup>cf. KUNST[1939: 101]: "... das gegenseitige Sichausschließen des *hetu* und des *vipakṣa* ..."

<sup>(153)</sup>vyatirekitā TSP (JK/Kunst/S, log pa nyid T) : 'vyabhicāritā PV/PVin(S)

<sup>(154)</sup>Cee PV 1.13ab: na cādarśanamātreṇa vipakṣe 'vyabhicāritā /  
cf. PVin(S) 2.65ab(=PVin 2.66ab): na yuktādṛṣṭimātreṇa vipakṣe 'vyabhicāritā /  
(=NBhūṣ 142,22)

<sup>(155)</sup>cf. KUNST[1939: 102]: "Die Konkomitanz stützt sich auf die Relation der Identität und der Kausalität."

「限定する性質をもつ因果関係あるいは本質にもとづいて、不可離関係の [二種への] 限定があるのであって、[異類群において証因を単に] 見ないことや [証因と所証の随伴関係を繰り返し] 見ることによるのではない」<sup>(156)</sup>

と。そしてこの場合 (=上に挙げた二つの推論式においては)、同一性あるいは因果関係という結合関係は存在しない。(1475-1476)

(J170a4; K430,23; S526,21; Kunst(T) 207,9 [D39a4; P69b7])

以下のような [反論] があるかもしれない。「『正しく確定された証相は逸脱しない<sup>(157)</sup>』というまさにこのことは、どうして [可能] なのか。というのも、この場合妥当性がないからである。<sup>(158)</sup>」 [これに対して Śāntaraksita は] 「**na hi svabhāvaḥ**」云々と答える。

(J74b5; D54a7; P66a6)

実に、[誤った例として挙げられた諸々の証相<sup>(159)</sup>は]、[所証の] 本質あるいは結果のいずれでもない。[所証が証相] それ自体であるか [証相の] 原因でなければ、[証相が所証と] 相違するかまたは原因をもたないことになるから。それら (=本質あるいは結果としての証相) なしに推理は存在しない。

**na hi svabhāvaḥ kāryaṃ vā svabhāvāt kāraṇād ṛte /  
bhedānimittatāprāptes te vināsti na cānumā //TS 1477//**

実に、証相は二種のみである。すなわち、**本質と結果**とであると [いわれる]。一方、非知覚は本質 [としての証因] の中に含まれる<sup>(160)</sup>。<sup>(161)</sup>また、「[証相] **それ自体**」あるいは「[証相の] **原因**」と名付けられる証相保持者 (=所証) なしには、それら二つの証相はありえない。もしありうるなら [証相は] 逸脱となるであろう。 [問:] 「どうしてありえないのか」というので、答える。 [答:] 「[証因が所証と] **相違するかまたは原因をもたないことになるから**。<sup>(162)</sup> 本質としての証因については、**相違する**つまりそれ自体ではなくなることとなり、結果としての証因に関しては、**原因をもたないこと** (animittatva= nirhetukatva) になる。また、本質 [としての証相] と

<sup>(156)</sup> Ce PV 1.31: kāryakāraṇabhāvād vā svabhāvād vā niyāmakāt /  
avinābhāvanīyamo 'darśanān na darśanāt //

この偈の思想的背景および対論者 (Īśvarasena, Kumārila) の見解を踏まえた新しい解釈については、STEINKELLNER[1997]において詳説されている。特に STEINKELLNER[1997: 642] の英訳を参照のこと。

<sup>(157)</sup> cf. TSP 526,9 ad TS 1475-1476: suvivecitam līṅgam na vyabharati.

<sup>(158)</sup> cf. KUNST[1939: 102]: “Zugegeben den Grundsatz, daß ein wohl bestimmter *hetu* nicht vieldeutig ist; warum ist dann [der in meinem Beispiel angeführte] *hetu* nicht gültig?”

<sup>(159)</sup> すなわち、TSP 521,17-522,14 ad TS 1459-1461 において挙げられた推論式中の <デーヴァダッタであるから> および <地 [の要素] から成るものであるから> 等の証相を指す。

<sup>(160)</sup> 非知覚が本質としての証因に還元されうるという議論については、IWATA[1991: 86-89], [1993] を参照のこと。

<sup>(161)</sup> 'di nas brtsams te / de yang add. T

<sup>(162)</sup> この直後に「bhedānimittatā という句は Dvandva 複合語で、-prāpteḥ とは Tatpuruṣa の関係で結びつく」という内容の文法的説明がなされているが、同内容の繰り返しとなるためここでは訳出していない。

結果 [としての証相] 以外の別の証相は認められない。別の [証相の] 場合、結合関係がないため不可離関係がありえないからである<sup>(163)</sup>。「te vinā」[のうち「それら」] というのは、本質 [としての証因] と結果 [としての証因] のことであり、これは両数の語尾である。(1477)

## 12. 「他者のための推理は正しい認識手段ではない」という他者の見解に対する批判

(J170a5; K431,6; S527,12; Kunst(T) 208,2 [D39b1; P70a4])

[ある対論者によって<sup>(164)</sup>]「一方、他者のための推理は、正しい認識手段ではない<sup>(165)(166)</sup>」と述べられたが、そのことに対して [Śāntarākṣita は] 「trirūpaliṅga-」云々と答える。

(J74b5; D54b1; P66a7)

三条件をもつ証相の陳述が、[論証] 能力をもつものを示すことから<sup>(167)</sup>他者のための推理と呼ばれるのは、聞き手を考慮してのことである。

trirūpaliṅgavacasaḥ śakta<sup>(168)</sup>-saṃsūcakatvataḥ /  
yat parārthānumānatvam uktaṃ tac chrotrapekṣayā //TS 1478//

(J74b5; D54b2; P66a7)

二次的に、また言語習慣から、このように推理 [という表現] が用いられるのである。それ故、[三条件をもつ証相の陳述は論証] 能力をもつものを示すものであるから、過大適用とはならない。

gaṇaṃ sāmketikaṃ caivam anumānatvam āśritam /  
śakta<sup>(169)</sup>-saṃsūcakatvena tena nātiprasajyate //TS 1479//

(J75a1; D54b2; P66a8)

[反論:] 「推理は正しい認識手段ではない」というならば、[答論:] あなたの主張は無益である。というのも、どのような人も [あなたの] 言明から [あなたの] 意図を理解できない [ことになる] からである。

nānumānaṃ pramāṇaṃ ced viphalā vyāhṛtis<sup>(170)</sup> tava /  
na kaścīd api vāco<sup>(171)</sup> hi vivakṣāṃ pratipadyate //TS 1480//

<sup>(163)</sup>avinābhāvāyogāt KS (med na mi 'byung bas mi rung ba'i phyir ro T) : avinābhāvo yogāt (sic) J

<sup>(164)</sup>TSP 522,15-18 ad TS 1462-1463 参照。

<sup>(165)</sup>na mānam JS (cf. rjes su dpag pa ma yin no T) : mānam K

<sup>(166)</sup>TS 1462ab.

<sup>(167)</sup>cf. KUNST[1939: 104]: “Da das Aussprechen des *trirūpahetu* beweiskräftig ist, ...”

<sup>(168)</sup>śakta- J/Kunst (nus pa'i T) : sakta- KS

<sup>(169)</sup>śakta- J/Kunst (nus pa T) : sakta- KS

<sup>(170)</sup>vyāhṛtis JS (smras pa T, TSP 528,17) : vyāhatis K

<sup>(171)</sup>vāco J (tvadvacanāt TSP) : vācā Kunst : vādo KS



言語表現が、他者のための推理と<sup>(172)</sup>呼ばれるのは、聞き手を考慮してのことである。それ故、話者を考慮することによって生じる誤りではない<sup>(173)</sup>。聞き手を考慮してのことであっても、[言語表現は] 三条件をもつ証相を示すことから推理の原因であるので、[原因に対して結果を] 転義的に適用することによって (upacāreṇa)<sup>(174)</sup>あるいは言語習慣から<sup>(175)</sup>推理と表現される<sup>(176)</sup>。まさしく [論証] 能力をもつものを<sup>(177)</sup>示すものには、推理という名称が適用されるからである<sup>(178)</sup>。<sup>(179)</sup> それ故、<感覚器官<sup>(180)</sup>>や<不可離関係という結合関係の認識<sup>(181)</sup>>もまた他者のための推理となってしまうという理由で [推理という名称の] 過大適用<sup>(182)</sup>となる、ということはない。それら両者には<sup>(183)</sup>、< [論証] 能力をもつものを<sup>(184)</sup>示すこと>がないからである。まさにこれ故、[自分のための推理は] 視覚を根拠とする<sup>(185)</sup>認識であるから、その [認識] には<sup>(186)</sup>[言語表現である他者のための推理との] ちがいがあ<sup>(187)</sup>。すなわち、聴覚的知識に

<sup>(172)</sup>gzhan gyi rjes su dpag par T for parārthānumānatvam

<sup>(173)</sup>skyon skyon du mi 'gyur ro T for doṣo na bhavati

<sup>(174)</sup>cf. PSV ad PS 3.1ab (北川 [1965: 470]), NB 3.1-2.

<sup>(175)</sup>TS 1479 の「gaṇṇaṃ」に対して「upacāreṇānumānakāraṇatvāt」という注釈がなされ、「sāṃketikaṃ」が「samayāt」と言い換えられていると理解しこのように訳出した。vā の取り方は T の支持 (nye bar btags nas rjes su dpag pa'i rgyu yin pa'i phyir ram / brda las rjes su dpag pa nyid du bshad de /) も得られる。  
cf. KUNST[1939: 105]: "... so ist das auch nicht wörtlich, sondern im » sekundären « und » konventionellen « Sinne (upacāreṇa) gemeint, und zwar deshalb, weil diese sprachliche Formulierung die Vorstellung des trirūpahetu hervorruft (trirūpaliṅgasūcanād) oder weil sie die Ursache des Schlusses bildet."

<sup>(176)</sup>cf. PVA 486,14f. anumānaṃ tad anumānakāraṇatvenopacārata uktam, na svataḥ. (小林 [2007: 158f] の和訳・解説も参照のこと)

<sup>(177)</sup>śakta- Kunst (nus pa T) : sakta- KS : saktam śakta- (sic) J

<sup>(178)</sup>T: rjes su dpag pa'i min sbyor ba'i phyir ro より。

<sup>(179)</sup>cf. KUNST[1939: 105]: "Als beweiskräftig (śaktasamśūcaka) wurde sie aber deswegen genannt, weil sie den psychischen Prozeß des Schlusses hervorruft (anumāna-saṃjñā)"

<sup>(180)</sup>ここでの<感覚器官>とは、TSP 522,20f ad TS 1464-1465 において反論者より提出される推論式：「聞き手にとって、言語表現は他者のための推理ではない。聞き手の [心] 相続において生じる知識の原因であるから、あるいは [対象を] 知らせるものであるから。例えば、感覚器官のように」の中の喩例を指す。

<sup>(181)</sup>これも、TSP 522,22f ad TS 1464-1465 において反論者より提出される推論式：「聞き手にとって、言語表現は他者のための推理ではない。直接推理対象を明示することはないから。不可離関係という結合関係の認識のように」の中の喩例を指している。

<sup>(182)</sup>-prasaṅgād atiprasaṅgo JK (thal bar 'gyur ba'i phyir ha cang thal bar T) : -prasaṅgo S

<sup>(183)</sup>tayoḥ JK : tayo S

<sup>(184)</sup>śakta- Kunst (nus pa T) : sakta- JKS

<sup>(185)</sup>-mūlāyāḥ J (cf. rtsa ba can gyi T) : -mūyayoh KS

<sup>(186)</sup>asyā JKS : asya Kunst

<sup>(187)</sup>この文章は、TS 1463 において反論者によって立てられた「聞き手にとっても、これ (=他者のための推理) は、ま

よって<sup>(188)</sup>ではなく、視覚的知識によって、直接煙等の証相は理解される。それ (=聴覚的知識) によっては、まさしく [音声としての] 言葉が<sup>(189)</sup>直接把握される。しかしながら、言葉は、煙のように外界の対象を [知らせる] 証相ではない。[言葉は話者の] 意図とは結びつけられる [が、それ] が外界 [の対象] と結合することは確立されないからである。単に [言葉は]、そのような煙等の証相を示すことにより、言語習慣によって [聞き手に] そのように判断する概念作用を生起 [させる] ため<sup>(190)</sup>、外界対象に [間接的に] 関係するという点で <他者のため [の推理] > と述べられるのである。一方、[話者の] 意図が知られるべきものとなる場合には、[言葉は] 聞き手にとって他でもなく <自分のため [の推理] > となる。すなわち、煙 [が火の結果である] ように、[言葉は] それ (=話者の意図) の結果であるから、[話者の] 意図に対して <知らせるもの > であると認められる。しかしながら、[外界対象を] <表示するもの > として [認められるわけ] ではない。<sup>(191)</sup> それ (=言葉) から [直接]、知識の対象<sup>(192)</sup> が理解されることはないからである<sup>(193)(194)</sup>。

「主張は無益である」というのは、「推理は正しい認識手段ではない」というこの [主張が無益であるということ] である。というのもすなわち、教示されるどのような人も、あなたの言葉から<sup>(195)</sup> [あなたの] 意図を理解できない [ことになるからである]。このことによって、[Śāntarākṣita は対論者の] <自身の言葉との矛盾 > を指摘している。またこのこと (=自身の言葉との矛盾) は、以前に<sup>(196)</sup> すでに説かれた。(1478-1480)

### 13. Purandara の反論とそれに対する答論

(J170b2; K431,26; S528,9; Kunst(T) 209,8 [D39b7; P70b5])

さしく自分のための推理となりうる。実に、聴覚 [を根拠とする認識] と視覚を根拠とする認識には、どのようなちがいがあるのか」という問いに対する答論となっている。

<sup>(188)</sup>śrotrajñānena KS (nyan pa'i shes pas T) : śrotro jñānena J

<sup>(189)</sup>śabda KS : śabdaṃ (sic) J

<sup>(190)</sup>cf. KUNST[1939: 106]: “Und da durch ihn eine adäquate (*tathādhyavasāyi*) Vorstellung (*vikalpa*) der Außenwelt (*bāhyārthāpekṣayā=parārthāpekṣayā*) [beim Hörer] entsteht, ...”

<sup>(191)</sup>cf. TSP 506,23-507,13 ad TS 1408-1409: yato vivakṣāyā asammukhībhāve śabdasyāprayogāt, tatkāryatvād dhūmavaj jātavedaso gamaka iṣṭa eva, na tu vācakarūpeṇa. (志賀 [2007: 156 with n.220] も参照)

<sup>(192)</sup>jñānārtha- em. (śes pa'i don T, cf. PVA 486,16) : jñāna- JKS

J, K, S いずれも jñāna- を支持するが、このまま直後の -apratīteḥ という表現と合わせて読むと「知識が理解されないから」となり、意味上の重複が起こる。T と PVA の関連箇所 (PVA 486,16: tato 'rthasyāpratīpatteḥ.) の支持から、上のように訂正する。

<sup>(193)</sup>rtogs pa'i phyir T for -apratīteḥ

<sup>(194)</sup>cf. KUNST[1939: 106]: “Denn aus der Nennung entsteht noch keine Erkenntnis.”

<sup>(195)</sup>tvadvacanād Kunst (khyod kyi thig las T) : tadvacanād JKS

<sup>(196)</sup>TSP 520,13-17 ad TS 1455 を指す。

一方, Purandara<sup>(197)</sup>は述べる。

「チャールヴァーカ派の人々によっても, 世間一般に承認された推理は認められうる。しかしながら, ある人々によって世間的な道を越えて推理と述べられるものは否定される。」<sup>(198)</sup>

[Śāntarakṣita は] このような [反論] を予期し, 論駁しようとしている。「laukikaṃ」云々と。

(J75a1; D54b3; P66b1)

「世間的な証相 (= 推理) は認められるが, 他の人々 (= 論理学者たち) によって構想された [証相] はそうではない」というならば, 世間の人々はまた, 結果等 [としての証相] にもとづいて, 真実として [も] 原因等 [としての所証] を理解する [といえる] のではないか。一方, 論理学者たちによっても, まさしくその同じもの (= 結果等としての証相) が確かに述べられている。そのような [証相] は世間的なものとして [も] 承認されているのに, どうしてあなたは [わざわざそれを] 捨て去るのか。<sup>(199)</sup>

laukikaṃ liṅgaṃ iṣṭaṃ cen na tv anyaiḥ<sup>(200)</sup> parikalpitaṃ<sup>(201)</sup> /  
nanu loko 'pi kāryāder hetvādīn avagacchati //TS 1481//  
tattvatas tu tad evoktaṃ nyāyavādibhir apy alam /  
tallaukikābhyānujñāne<sup>(202)</sup> kiṃ tyaktaṃ bhavati tvayā<sup>(203)</sup> //TS 1482//

<sup>(197)</sup>Purandara という論師の名がその説と共に引用される例は極めて少なく (渡邊 [1994: 57]), 現時点ではこの人物の年代・著作いづれについても確かなことはいえないが, 参考までに以下に Purandara の関連情報を挙げておく。まず, その名を冠した *Paurandarasūtra* という著作の断片の存在が, 渡邊 [1994: 19-22], 生井 [1996: 12] によって報告されている。

SVR 265,21f: pramāṇasyāgaṇatvād(\*) anumānād arthaniścayo durlabha iti paurandaraṃ sūtram.

(\*) agaṇatvād em. by 渡邊 [1994: 20 with n.61] : gaṇatvād (sic)

この断片は, SVR の他, PVSVT 25,26, NM vol.1.108,10, NBhūṣ 210,18, PKM 180,1f (so 'yaṃ cārvākaḥ ... ity ācakṣāṇaḥ ...), TBV 70,26f にも引用される。(渡邊 [1994: 19-22 with n.50-70]) これらの断片のうち, PKM のものはチャールヴァーカ派の説であることを支持するため, SVR の記述と合わせて考慮すれば *Paurandarasūtra* はチャールヴァーカ派の文献であり, その著者と推察される Purandara もチャールヴァーカ派に属すると考えられる。(cf. 生井 [1996: 12])

一方, 渡邊 [1994: 87, n.214] は別の可能性を想定している。TSP の Purandara 説中に見られる「cārvākair api」という表現は, Purandara がチャールヴァーカ派であった場合, 自らが属する学派名を挙げるのは不自然であるとし, Aviddhakarna がニヤーヤ学派に属しながらもチャールヴァーカ派の思想の研究を行ったのと同様に (本稿脚注 (218) 参照), Purandara もまたチャールヴァーカ派に属していたわけではなく元来はニヤーヤ学派の論師であったのではないか, というものである。なお, 渡邊 [1994: 21f; 57] は Purandara を 700 年頃の論師と推測し, *Paurandarasūtra* との直接的関係も否定している。

<sup>(198)</sup>Ce *Paurandarasūtra* (?)

<sup>(199)</sup>生井 [1996: 127 with n.51f] の和訳も参照のこと。

<sup>(200)</sup>cen na tv anyaiḥ JK (gzhan ni ... min zhes na T) : cet tattvataḥ S

<sup>(201)</sup>parikalpitaṃ KS : parikalpitaḥ J

<sup>(202)</sup>tallaukikābhyānujñāne J/Kunst/TSP (cf. 'jig rten pa de khas blangs pa T) : tallaukikābhyānujñāte KS

<sup>(203)</sup>tvayā J/Kunst/S (khyed la T) : svayam K

「真実として [も]<sup>(204)</sup>」という [句] は、「原因等 [としての証相] を理解する」という [句] につながる。「結果等 [としての証相] にもとづいて」[という句の]「等」という語によって本質 [としての証相] が把握される。同様に、「原因等 [としての所証] を」という場合もまた、まさに [証相] それ自体 [としての所証] が把握される。一方、[*hetvādīn* と] 複数形になっているのは、個物のちがいからである。世間の人々が、同一関係と因果関係によって結合されたある証相にもとづいて<sup>(205)</sup>対象を理解する<sup>(206)</sup>場合、まさにその同じ証相が、我々によって [も] 述べられている。そのような [証相] は [世間的なものとしても] 承認されているのに、どうして [あなたはそれを] 捨て去るのであろうか。[もし捨て去るなら] そのような [証相] が [正しい] 推理であることは否定されてしまうであろう<sup>(207)</sup>。(1481-1482)

## 14. 論争する両者の一方が推理を正しい認識手段と認めない場合に生じる問題

### 14.1. 正しい認識手段でないものによって生み出される認識の誤謬

(J170b3; K432,9; S528,16; Kunst(T) 209,23 [D40a4; P71a1])

あるいはまた、[以下のような反論が] あるかもしれない。「我々にとっては、どんな推理も [正しい認識手段として] 認められないが、それ (=推理) は対論者によっては正しい認識手段と認められる。そのことは [仮に] 承認されるので、私の主張は<sup>(208)</sup>無益とはならない<sup>(209)</sup>。<sup>(210)</sup>」<sup>(211)</sup> この [反論] に対して、[Śāntarakṣita は] 「*apramāṇena*」云々と答える。

(J75a3; D54b4; P66b2)

また [立論者自身は] 正しい認識手段で [あると認めてい] ないこれ (=推理) によって、どう

(204)tattvata JS ([na tv anyata] is cancelled in J. cf. gzhan ma yin zhes bya ba T) : nanu loko 'pi K

(205)yata eva līngāt JS (rtags gang kho na las T) : yato līngāt Kunst : yad eva līngam K

(206)loko 'rtham J/Kunst : lokārtham KS

(207)cf. KUNST[1939: 108]: “so daß ihr letzten Endes zur Leugnung (*tyakta* = *niṣedha*) des *anumānatva* auch in jenem [von euch akzeptierten Schluß] gelangt.”

(208)vyāhrtir n.e. T

(209)cf. TS 1480b: viphalā vyāhrtis tava.

(210)生井 [1996: 128] の和訳も参照のこと。

(211)この反論について Kunst 氏は、直前に登場した Purandara(チャールヴァーカ派)によるものであるか否かが不明瞭であるとした上で、反論の論法自体は中観学派の帰謬論証に類似していると述べている。(KUNST[1939: 108f, n.3])

一方、生井 [1996: 128-131] は、Purandara が Jayarāśī の主張する<専一批判論 (paraparyanuyogapara)>の立場の影響を受けたと考えれば、これが Purandara からの反論であつても不自然ではないとする。さらに、渡邊 [1994: 32f with n.144, 157] は、この反論が、直後の TSP ad TS 1484 に現れる Aviddhakarṇa の *Tattvaṭīkā* からの引用ではないかと推定している。*Tattvaṭīkā* の明示的な引用はこの反論より後に現れる点から、この反論を *Tattvaṭīkā* からの直接の引用であると断定することは難しい。しかしながら、TS 1483 と TS 1484 およびそれぞれに対する TSP は反論と答論の一連の流れを形成していることから、ここではこの反論を Aviddhakarṇa あるいは彼に近い思想的立場の者によるものと考えておきたい。

して対論者に [自らの主張を] 理解させ [ることができ] ようか<sup>(212)</sup>。また、正しい認識手段でないものによって生み出されるこの認識はいかなるものになろうか。

apramāṇena caitena paraḥ kiṃ pratipādyate<sup>(213)</sup> /  
apramāṇakṛtāś cāsau pratyayaḥ kīdṛśo bhavet //TS 1483//

また、「対論者によってそれ (=推理) が正しい認識手段であると承認される」という確定 [知] はどこから生まれたのか。というのも、対論者による承認は直接知覚されるものではないからである。またあなたにとって、それによって確定 [知] が生まれるような [直接知覚以外の] 他の正しい認識手段は存在しない。仮に確定 [知] があるとしよう。そうであるとしても、[立論者は] 対論者によって承認される [が、自らは] 正しい認識手段で [あると認めてい] ないもの (=推理) によって、どうして対論者に [自らの主張を] 理解させ [ることができ] ようか<sup>(214)</sup>。これ (=上述の反論) は決して [正当な] 論難<sup>(215)</sup>ではない<sup>(216)</sup>。

あるいはまた、[以下のような反論が] あるかもしれない。「ちょうど、[ある人が] 敵の手から剣を奪った後、その [剣] によってまさにその敵が殺されるのと同様に、[立論者は] 対論者によって正しい認識手段であると承認されたまさにそのようなもの (=推理) を採用した後、[その推理によって] 対論者が否定される。」<sup>(217)</sup>

以上のような [反論] を予期して、[Śāntarakṣita は] 「apramāṇakṛtaḥ」云々という。以下のことが述べられたことになる。もしある [立論] 者が、迷妄から、決して正しい認識手段ではないものを正しい認識手段であると見なして採用した場合、その正しい認識手段ではないものによって、いかにして対論者に正しい知識が生まれようか。正しい認識手段は、正しい知識を結果とするからである。実に、迷妄から、[剣ではないものを] 剣であると見なして [相手から] 取り上げたある刃物によって [その] 相手が切られるということはあるにない。以上から、[上記の] 喩えは [喩えられるものとの] 類似 [関係] がない。(1483)

(212) 具体例を補って直訳すると、「[立論者 (=パールハスパティヤ派) が正しい認識手段とは認めていない] この正しい認識手段ではないもの (=推理あるいは論証) によって、どうして対論者 (=仏教徒) は [『推理は正しい認識手段ではない』というパールハスパティヤ派の主張を] 理解させられるであろうか」となる。

(213) pratipādyate Kunst/TSP (cf. rtogs par byed T) : pratipadyate JKS/生井 [1996: 129, n.57]

(214) pratipādyate J (TSP 529,13f, cf. rtogs par byed T) : pratipadyate KS

(215) zhen pa T for vyaśana

(216) cf. KUNST[1939: 109]: “Es handelt sich hier nicht darum, jemandem etwas einzureden (*na vai vyaśanam*), [sondern man will dem Gegner auf Grund logischer Argumente wirkliche Erkenntnis vermitteln].”

(217) 渡邊 [1994: 32 with n.144] によると、この反論も Aviddhakarṇa の *Tattvaṭīkā* からの引用ではないかと推定されている。

cf. PVSVT 26,23f: yad apy ucyaṭe, parasiddhenānumānenānumānaṃ niśidhyaṭa iti tad apy etena nirastam iti.

NBhūṣ 223,23: parābhiprāyeṇānumānaṃ apy anumānaṃ uktam ato na virodha iti cet.

TBV 555,29f: yad api paraprāsiddhenānumānena tad eva niśidhyaṭa iti ucyaṭe, tad apy etenaiva nirastam. 渡邊 [1994: 32 with n.145-147] も参照のこと。

## 14.2. Aviddhakarṇa の反論

(J170b6; K432,22; S529,13; Kunst(T) 210,19 [D40b1; P71a7])  
Aviddhakarṇa は, *Tattvaṭīkā*<sup>(218)</sup>において述べる。

「また、『立論者自身は] 正しい認識手段で [あると認めてい] ないもの (=推理) によって<sup>(219)</sup>, どうして対論者に [自らの主張を] 理解させ [ることができ] ようか<sup>(220)</sup>。というのも, 理解させるものは, [論争する] 両者にとって確立されたもの [でなければならぬ] からである』というこのことは正しくない。なぜなら, 言語表現を本質とする推理は, [そもそも] 話者 (=立論者) にとって正しい認識手段ではないからである。しかしながら一方で, 話者はそれ (=言語表現を本質とするもの) によって対論者に [自らの主張を] 理解させる [ことはできる]。<sup>(221)</sup> [その際話者によってなされる] 努力は, 対論者に<sup>(222)</sup>[自らの主張を] 理解させること [のみ] を目的としているので, 必ずしも両者にとって確立されたものが必要とされるわけではない<sup>(223)</sup>。』<sup>(224)</sup>

(218)この箇所では他の箇所とは異なり, Aviddhakarṇa の見解が *Tattvaṭīkā* という著作名と共に紹介されている。Aviddhakarṇa という人物は, 一般にニヤーヤ学派の論師として知られている (VNT 78,21f, 志賀 [2008: 120, n.164]) が, SVin, intro. 75f, STEINKELLNER[1961: 153ff] によると, チャールヴァーカ (=パールハスパティヤ) 派にも Aviddhakarṇa という同名の人物が存在したとされる。この点について, Steinkellner 氏は以下のように推測している。Kamalaśīla が TSP において対論者の見解を紹介・引用する場合, いくつかの例外を除いて, 対論者の名前のみを挙げ書名を示さないのが通例である。Aviddhakarṇa の説を引用する際も, ほとんどの箇所 (TSP 106,9ff, 172,12, 233,12f, 279,22ff, 516,9ff, 553,13f, 556,22f) では人名のみを挙げており, 「*Tattvaṭīkā* において」と書名を挙げるのはこの箇所のみである。(cf. TSP 521,15) この状況から判断するに, Kamalaśīla はニヤーヤ学派の Aviddhakarṇa の説とチャールヴァーカ派の Aviddhakarṇa の説を明確に区別するために, この箇所においては例外的に人物名と共に書名を示した可能性が高い。(STEINKELLNER[1961: 154f], [1963])

一方, 渡邊 [1994: 56-59] は, 上述のような Aviddhakarṇa 二人説を採らず, Aviddhakarṇa は一人であり一貫してニヤーヤ学派の論師であったとする。渡邊 [1994: 57 with n.291] によると, 「Aviddhakarṇa の *Tattvaṭīkā* は, Cārvāka 派の主張を紹介した書物であり, 「Aviddhakarṇa も, Bhāvīvikta の場合と同様に, *Bhāṣyaṭīkā* を著わすと同時に Cārvāka 派の研究もして *Tattvaṭīkā* を著わすが, 彼は一貫して Naiyāyikaḥ であった」。そしてその理由を「彼をして Cārvāka 派の研究に向かわしめた最大の動機は Dharmakīrti の *Svabhāva-pratibandhaḥ* 説にあったと思われる」と推測している。

(219)cāpramāṇena J (cf. 'on te tshad ma ma yin pas T) : vāpramāṇena Kunst : vā pramāṇena KS

(220)cf. TSP 528,20 ad TS 1483: tenāpramāṇena parābhyupagatena kimiti paraḥ pratipādyate.

(221)cf. T: gang gi phyir tshig gi bdag nyid kyi rjes su dpag pa smra ba po dag la tshad ma yin la / yang smra ba po des gzhan rtogs par byed pa yang ma yin te /

(222)gzhan don T for para-

(223)cf. KUNST[1939: 110]: "... ist die Anerkennung [des *pramāṇa* des Schlusses] durch beide Parteien bestimmt überflüssig."

(224)Ce *Tattvaṭīkā*

cf. PVSVT 26,17ff: na cāpramāṇakena paraḥ paryanuyujyate vā diprativādinor asiddhatvāt. atha va-

[Śāntarakṣita は] 「**anumānam**」云々ということによって、上記 [の反論] を予期する。

(J75a3; D54b4; P66b3)

[反論:] 言語表現を本質とする推理は、話者 (=立論者) にとって正しい認識手段ではない。  
(225) [しかしながら] 彼 (=話者) は、それ (=言語表現を本質とするもの) によって、例えば「これ (=論証の主題) は、それ (=所証属性) をもつにちがいない」[という] ように [対論者に対して] 明示する [ことはできる]。

**anumānam pramāṇam ced vaktur<sup>(226)</sup> na vacanātmakam /  
prakāśayati tenāyaṃ yathā<sup>(227)</sup> tadvad idaṃ bhavet //TS 1484//**

「**ayam**」とは「話者は」[を指す]。「**tena**」とは「言語表現を本質とするものによって」[を指す]。<sup>(228)</sup> (1484)

### 14.3. Aviddhakarṇa の見解に対する答論

(J171a1; K433,4; S529,18; Kunst(T) 211,6 [D40b3; P71b2])

[Śāntarakṣita は] 「**ajñāta-**」云々ということによって、論駁を述べる。

(J75a4; D54b5; P66b4)

それ (=言語表現としての推理) が正しい認識手段ではないと認められるのは、未だ知られていない対象を明らかにすることがないからであって、[論証] 能力をもつものを示すことがないからではない<sup>(229)</sup>。一方、あなたの [いう推理] はそのようなもの (=論証能力をもつも

---

canātmakam anumānam na vaktuḥ pramāṇam, atha vacanena paraṃ pratipādayati, tathāpramāṇakena paryanuyogaḥ kriyāta iti.

NBhūṣ 223,29-224,5: yat punar atroktam: paraprasiddhena svaprāmāṇyam anabhyupagamyāprāmāṇyam pratipādyate. na cobhayasiddham eva pramāṇam. yasmād vacanātmakam anumānam vaktur na pramāṇam, atha ca vaktā tena paraṃ pratipādayati, parapatipādanārthatvāc ca prayāsasya. tāvata[tāvata em. by 渡邊 [1994: n.151] : tāvasya (sic)] ubhayaprasiddhena na[-prasiddhena na em. (cf. TSP 529,16) : -prasiddhe na 渡邊 [1994: n.151] : -prasiddhena (sic)] prayojanam. idaṃ cātra sampradhāryam. svato 'prasiddho hetur dṛṣṭānto vā yaśya prasiddhas taṃ pratyupādīyamānaḥ paraṃ pratyāyayati. uta neti. na ca śakyaṃ vaktum, pratyāyayatīti. tasmād ubhayaprasiddhir akāraṇam iti.

TBV 555,25ff: na cāpramāṇakena paraḥ paryanuyujyate vādiprativādinoh paryanuyogasya pramāṇatvenāsiddheḥ. atha yathā vacanātmakam anumānam na vaktuḥ pramāṇam, atha cānena vaktā parān pratipādayati, tathāpramāṇakena paryanuyogaḥ kriyāta iti.

渡邊 [1994: 32f with n.148-152] も参照のこと。

(225)cf. KUNST[1939: 111]: “Sagt man: » der Schluß ist kein *pramāṇa* für den Sprechenden ‹, so is das falsch, denn er ist seinem Wesen nach eine Rede.”

(226)vaktur J/Kunst/S (smra ba po yi T) : cakrur K

(227)yathā JKS (cf. des ni de bzhin 'gyur zhe na T) : tathā Kunst

(228)cf. T: de yis zhes bya ba ni tshig gi bdag nyid kyis so // 'di ni zhes bya ba ni smra ba po'o //

(229)cf. KUNST[1939: 111]: “... nicht aber deshalb, weil er keine Kraft etwas zu beweisen, besitzt.”

のを示すもの)ではない。

**ajñātārthāprakāśatvād apramāṇaṃ tad iṣyate /  
nāśaktasūcakatvena tāvakīnaṃ tathā na tu<sup>(230)</sup> //TS 1485//**

実に、言語表現が、話者にとって正しい認識手段ではないと認められるのは、[論証]能力をもつものを示すことがない[という理由]から<sup>(231)</sup>ではない。それではどうなのかといえば、**未だ知られていない対象**を明らかにすることがない[という理由]からである。これ(=言語表現=我々仏教徒のいう推理)には、<[論証]能力をもつものを<sup>(232)</sup>示すこと>がありうる。一方、あなたの[いう]推理は[論証]能力をもつものを<sup>(233)</sup>示すもの**ではない**。従って、[両者の考える推理は]一致しない<sup>(234)</sup>。というのも、さもなければ(=両者の見解が一致するなら)、[推理は]まさしく両者にとって確立されたものとなるであろうからである。それ故、論理から逸脱しないような[推理という]認識手段は、直接知覚と同様にあらゆる人々にとって妥当なものである<sup>(235)</sup>というのは正しい<sup>(236)</sup>。(1484-1485)

<sup>(230)</sup>na tu J/Kunst : nanu KS

<sup>(231)</sup>aśaktasamsūcanād Kunst (nus pa ston pa ma yin pa'i phyir tshad ma nyid T) : samsūcanād JKS

<sup>(232)</sup>śakta- Kunst (nus pa T) : sakta- JKS

<sup>(233)</sup>śakta- Kunst (nus pa) : sakta- JKS

<sup>(234)</sup>cf. KUNST[1939: 111]: “Es handelt sich also um ganz verschiedene Fälle.”

<sup>(235)</sup>cf. T: rigs pa dang ldan pa gang yin pa de ni thams cad du tshad ma nyid du rigs te / mngon sum bzhin no ...

<sup>(236)</sup>rigs pa yin pa'i phyir ro T for nyāyyam.



## Appendix I

### TS/TSP 「推理の考察」章, テキスト訂正箇所一覧

以下に, 従来の読み (K, S, Kunst) に対して新たに訂正を施した箇所を列挙する。なお, 本稿脚注中と同様, 訂正箇所には 下線 を施し, 確認のため訂正根拠および異読も示しておく。

#### TS 1361-1485

TS 1421b (志賀 [2008: n.12])

'numitir yataḥ em. : 'numatir yataḥ JS (cf. rtogs pa yin // gañ las T) : 'numitir matā

Kunst : 'numitair matāḥ K

TS 1441b (志賀 [2008: n.175])

kecid ācaḥṣate 'nyathā J (cf. kha cig gzhan du smra bar byed T) : kecid evaṃ pracakṣate

K/Kunst/S

TS 1472b (本稿 n.121)

īdr̥śy asti J : īdr̥śe 'sti Kunst/KS

TS 1480c (本稿 n.171)

vāco J (tvadvacanāt TSP) : vācā Kunst : vādo KS

#### TSP 494,22-529,21

TSP 502,13 (志賀 [2007: n.143])

yasmin vāde sthitais tair J : tasmin vāde sthitair eva Kunst : yasmin vāde sthitas tair KS

TSP 503,13 (志賀 [2007: n.160])

liṅgena candratvaṃ J (rtags kyis zla ba nyid du T) : acandratvaṃ Kunst : candratvaṃ KS

TSP 503,18 (志賀 [2007: n.165])

tatraivam abhisambandhaḥ J (der 'di ltar sbrel bar bya ste T) : tatraivam iti sambandhaḥ

KS

TSP 504,19 (志賀 [2007: n.180])

asiddhe em. (PV 1.191a, cf. ma grub pa la T) : asiddher JK/Kunst/S

TSP 508,18 (志賀 [2007: n.242])

tasya kṛtakasya J (byas pa de ni T) : na hi kṛtakatvasya KS

TSP 508,20 (志賀 [2007: n.245])

-ātmakasya kāryasya J (cf 'bras bu T) : -ātmakasya KS : -ātmakaṃ Kunst

TSP 512,9f (志賀 [2008: n.76])

aśaktasam̐sūcaka- em. (asaktasam̐sūcaka- J) : śaktāsam̐sūcaka- Kunst : saktāsam̐sūcaka-

KS, cf. nus pa ston pa'i phyir T

TSP 512,17 (志賀 [2008: n.91])

-vyatiriktaśeṣa- J (ma gtogs pa lhag ma T) : -vyatirikta- KS

TSP 515,23 (志賀 [2008: n.162])

niryuktikāt J : niryuktikāt tu KS

TSP 516,10 (志賀 [2008: n.165])

- naiko 'rthaḥ J (VNT 65,15) : naikārthaḥ KS  
TSP 520,15 (本稿 n.12)
- vyavaharatā J (cf. tha snyad du T) : vyāharatā KS  
TSP 520,22f (本稿 n.25)
- vivakṣitaḥ sādhyadharmo J (TSP 525,16, cf. brjod par 'dod pa'i bsgrub bya'i chos ni T) :  
vivakṣitasādhyadharmo KS  
TSP 522,14 (本稿 n.56)
- aniṣṭhā J (mthar mthug pa med T) : aniṣṭā KS (cf. KUNST[1939: 89])  
TSP 524,17 (本稿 n.102)
- sādhanaṃ dūṣaṇam J (PVSV 153,19, cf. sgrub pa dang sun 'byin pa yin no T) :  
sādhanadūṣaṇam KS  
TSP 425,9 (本稿 n.114)
- na ca trairūpyam em. (TSP 520,21) : na ca trairūpya JKS : tac ca trairūpyam Kunst  
TSP 425,13 (本稿 n.122)
- īdṛṣīti J (TS 1472b) : īdṛśa iti KS  
TSP 527,17 (本稿 n.185)
- mūlāyāḥ J (cf. rtsa ba can gyi T) : -mūyayoḥ KS  
TSP 527,23f (本稿 n.192)
- jñānārtha- em. (śes pa'i don T, cf. PVA 486,16) : jñāna- JKS  
TSP 528,20 (本稿 n.214)
- pratipādyate J (TSP 529,13f, cf. rtogs par byed T) : pratipadyate KS  
TSP 529,13 (本稿 n.219)
- cāpramāṇena J (cf. 'on te tshad ma ma yin pas T) : vāpramāṇena Kunst : vā pramāṇena  
KS

## Appendix II

### TS/TSP「推理の考察」章に引用される文献・テキスト一覧

TS/TSP「推理の考察」章において、明示的に引用されるテキスト (**Ce**, **Cee**) あるいはそれに準ずるもの (**Ce'**, **Ce'e**) を著者別に列挙する<sup>(237)</sup>。なお、引用元との異読がある場合でも、TS/TSP に引用された形で表示する。

#### anya

TSP 522,15-18 (書名未比定):

parārtham anumānaṃ vaktrapekṣayānuvādatvān na pramāṇam. śrotrapekṣayā tu svārtham eva, ko hi viśeṣaḥ śrotradvāreṇa tam arthaṃ pratipadyate, darśanadvāreṇa veti. yathā

<sup>(237)</sup> 本来は、明示的・直接的に引用されたテキストと二次的に使用されたテキストは区別するべきであるが、煩雑になるのを避けるため、一括してリストアップした。引用元と完全に一致する場合は、「=」、少しでも差異がある場合は「≠」で表示している。

darśanendriyasya vyāpāre sati parārthavyapadeśo na bhavati, evaṃ śrotrendriyavyāpāre 'pi mā bhūt.

### **Aviddhakarṇa**

TSP 516,10f (書名未比定, *Bhāṣyaṭīkā?*):

viprakīrṇaiś ca vacanair naiko 'rthaḥ pratipādyate /

tena sambandhasiddhyartham vācyam nigamanam pṛthak // (= VNT 65,15f)

TSP 529,13-16 = *Tattvaṭīkā*:

nanu cāpramāṇena kimiti paraḥ pratipādyate, ubhayasiddham hi pratipādakaṃ bhavatīti. tad etad ayuktam, yasmād vacanātmakam anumānam, na ca vaktuḥ pramāṇam. atha ca vaktā tena paraṃ pratipādayati. parapratipādanārthatvāt prayāsasya, nāvaśyam ubhaya-siddhena prayojanam.

### **Uddyotakara(ādi)**

TSP 515,15-19 (書名未比定):

na paunaruktyam atra, yasmāt sādhyanirdeśaḥ pratijñā, nigamanam tu siddhanirdeśaḥ. punaḥśabdaḥ sādṛśye, tena pratijñāsadrśam vacanam ity uktam bhavati. na ca nigamanena vinā siddhir asti. tathā hi tena vinā tadanyāvayavoktāv api śaṅkā na nivarttate kim anityaḥ śabda iti, atas tadaśaṅkānivṛttyartham vācyam nigamanam pṛthak.

### **Kumārila**

TS 1442 = ŚV(anumāna) 141:

pratyakṣadr̥ṣṭasambandham yayor eva viśeṣayoḥ /

gomayendhanataddeśaviśeṣādimitiḥ kṛtā //

TS 1443 = ŚV(anumāna) 142:

taddeśasthena tenaiva gatvā kālāntare 'pi tam /

yadāgniṃ budhyate tasya pūrvabodhāt punaḥ punaḥ //

TS 1444 = ŚV(anumāna) 143:

saṃdihyamānasadbhāvavastubodhāt pramāṇatā /

viśeṣadr̥ṣṭam etac ca likhitam vindhyavāsīnā //

TSP 517,11 (517,10) = ŚV(anumāna) 140d:

tasmād evaṃ pracakṣate.

TS 1445 = ŚV(anumāna) 145:

agnidhūmāntaratve ca vācye sāmānyatomitau /

sāmānyadr̥ṣṭam ekāntād gantety āditya ucyate //

### **Gautama**

TSP 514,7 = NS 1.1.38:

udāharaṇāpekṣas tathety upasaṃhāro na tatheti vā sādhyasyopanayaḥ.

TSP 515,8 = NS 1.1.39:

hetvapadeśāt pratijñāyāḥ punarvacanam nigamanam.

### **Dignāga**

TS 1361cd = PS 2.1a'b=PVin 2.1a'b, SVR 23,9, 12f:

svārtham trirūpato liṅgād anumeyārthadarśanam //

TS 1362cd ≡ PS 2.6cd (北川 [1965: 456]):  
 ekaikadvidvirūpo 'rtho līngābhāsa tato mataḥ //  
 TSP 495,14f = PS 2.7 (北川 [1965: 457]):  
 kṛtakatvād dhvanir nityo mūrtatvād aprameyataḥ /  
 amūrtaśrāvaṇatvābhyām anityaś cākṣuṣatvataḥ //  
 TS 1384ab (= *Hetumukha?* ≡ PV 1.1ab, HB 1\*,8):  
 grāhyadharmas tadamaśena vyāpto hetuḥ. (= NV 303,5)  
 TSP 503,8f (503,21) ≡ PSV (K) P125a5f, (V) D40b7f; P43b1f (北川 [1965: 472]):  
 yatrāpy asādhāraṇatvād anumānābhāve śābdaprasiddhena viruddhenārthenāpohyate,  
 yathācandraḥ śaśī sattvād iti nāsau pakṣaḥ. [= PVA 545,8ff, cf. NMukh (桂 [1984: 113ff])] )  
 TSP 512,16 ≡ PS 4.1cd (北川 [1965: 512,10f]) = VNT 92,9:  
 yato rūpadvayaṃ śeṣaṃ dṛṣṭāntena pradarśyate /  
 TSP 514,8f (書名未比定):  
 upanayavacanam na sādhanam, uktahetvarthaprakāśakatvāt, dvitīyahetuvacanavat.  
 TSP 515,14 (書名未比定):  
 nigamanam punaruktatvād eva na sādhanam.  
 TSP 524,16f ≡ NMukh (桂 [1977: 125]) = PVS 153,19f; 13,17:  
 ya eva tūbhayaniścitavācī sa eva sādhanam dūṣaṇam.

**Dharmakīrti**

TS 1362ab' ≡ NB 3.1:  
 trirūpalingavacanam parārtham.  
 TSP 503,16f = PV 4.120:  
 candratām śaśīno 'nicchan kām pratītiṃ sa vāñchati /  
 iti taṃ praty adṛṣṭāntam tad asādhāraṇam matam //  
 TSP 504,17 ≡ PVS 95,19f:  
 sattāyām hi sādhyāyām sarvo hetus trayīm doṣajātīm nātivarttate.  
 TSP 504,19f = PV 1.191:  
 nāsiddhe bhāvadharmo 'sti vyabhicāry ubhayāśrayaḥ /  
 dharmo viruddho 'bhāvasya sā sattā sādhyate katham // (=NVinVi 2.13,16f, cf. PV 1.187)  
 TS 1417 ≡ PV 1.336:  
 nāyam svabhāvaḥ kāryam vā dṛśyasyādṛṣṭir eva vā /  
 na ca tadvyatiriktasya bhavaty avyabhicāritā //  
 TSP 510,17f = PV 1.9 = PVin 3.65:  
 ekasāmagryadhīnasya rūpāde rasato gatiḥ /  
 hetudharmānumānena dhūmendhanavikāravat //  
 TSP 512,8 ≡ PV 4.17a:  
 sādhyasyaivābhīdhānena.  
 TSP 512,11f = PV 4.16:  
 tat pakṣavacanam vaktur abhiprāyanivedane /  
 pramāṇam samśayotpattes tataḥ sāksān na sādhanam //

TSP 512,13 = PV 4.17ab:

sādhyaivaivābhīdhānena pāramparyeṇa nāpy alam /

TSP 513,9f = NB 2.7:

sādhya dharmasāmānyena samāno 'rthaḥ sapakṣaḥ. (=NP 1,10f)

TSP 523,16f = PV 3.82:

liṅgalingidhiyor evaṃ pāramparyeṇa vastuni /

pratibandhāt tadābhāsaśūnyayor apy avañcanam //

TSP 523,18f = PV 2.1ab':

pramāṇam avisamvādi jñānam.

TSP 526,15 = PV 1.13ab:

na cādarśanamātreṇa vipakṣe vyatirekitā / (cf. PVin(S) 2.65ab)

TSP 526,17f = PV 1.31:

kāryakāraṇabhāvād vā svabhāvād vā niyāmakāt /

avinābhāvānyamo 'darśanān na darśanāt //

### **Pātrasvāmin**

TS 1363-1378 (= *Trilakṣaṇakadarthana?*)

anyathānupapannatve nanu dṛṣṭā suhetutā /

nāsati tryaṃśakasyāpi tasmāt klībās trilakṣaṇāḥ // (TS 1363)

anyathānupapannatvaṃ yasyāsau hetur iṣyate (= HBTĀ 374,3) /

ekalakṣaṇakaḥ so 'rthaś caturlakṣaṇako na vā // (TS 1364<sup>(238)</sup>)

yathā loke tripuraḥ sann ekaputraḥ ucyate /

tasyaikasya suputratvāt tathehapi ca dṛṣyatām // (TS 1365)

avinābhāvasambandhas trirūpeṣu na jātucit /

anyathāsambhavaikāṅgahetuṣv evopalabhyate // (TS 1366)

anyathānupapannatvaṃ yasya tasyaiva hetutā /

dṛṣṭāntau dvāv api stām vā mā vā tau hi na kāraṇam (= HBTĀ 374,4) // (TS 1367)

nānyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim /

anyathānupapannatvaṃ yatra tatra trayeṇa kim // (TS 1368<sup>(239)</sup>)

sa śyāmas tasya putratvād dṛṣṭāḥ śyāmā yathetare /

iti trilakṣaṇo hetur na niścītyai pravartate // (TS 1369)

tatraikalakṣaṇo hetur dṛṣṭāntadvayavarjitaḥ /

kathañcid upalabhyatvād bhāvābhāvau sadātmakau // (TS 1370)

candratvenāpadiṣṭatvān nācandraḥ śāśalāñchanaḥ /

iti dvilakṣaṇo hetur ayaṃ cāpara ucyate // (TS 1371)

patatkīṭakṛteyaṃ me vedanety avasīyate /

patatkīṭakasamsparsapratilabdho dayatvataḥ // (TS 1372)

(238) PST D81b6; P92a5f (Skt. B54a1) にも引用される。

(239) PVSVT 9,9f, SVinT 372,3f, PMi 45,17f, NVin 323 (=2.154), TBV 569,28f, TAŚ 203,11; 205,18, NASV 102,27f, SVR 520,5ff 等にも引用される。TS では ab 句と cd 句が逆になっている。

cakṣū rūpagrahe kārye sadātīśayaśaktimat /  
 tasmin vyāpāryamāṇatvād yadi vā tasya darśanāt // (TS 1373)  
 kathañcid asadātmāno yadi vātmaghaṭādayaḥ /  
 kathañcin nopalabhyatvāt kharasambandhiśṅgavat // (TS 1374)  
 kathañcana sadātmānaḥ śaśaśṅgādayo 'pi ca /  
 kathañcid upalabhyatvād yathaivātmaghaṭādayaḥ // (TS 1375)  
 tvadīyo vāpi pitātrāsti veśmanīty avagamyate /  
 bhāvatkapitrṣabdasya śravaṇād iha sadmani // (TS 1376)  
 anyathānupapattyaiva śabdādīpādivastuṣu /  
 apakṣadharmabhāve 'pi dṛṣṭā jñāpakatāpi ca // (TS 1377)  
 tenaikalakṣaṇo hetuḥ prādhānyād gamako 'stu naḥ /  
 pakṣadharmādibhis tv anyaiḥ kiṃ vyarthaiḥ parikalpitaiḥ // (TS 1378)  
 TSP 500,13-16 (= *Trilakṣaṇakadarthana?*):  
 vinā sādhyād adṛṣṭasya dṛṣṭānte hetuteṣyate /  
 parair mayā punar dharminy asambhūsnor vināmunā //<sup>(240)</sup>  
 arthāpattes ca śābaryā bhaikṣavāc cānumānataḥ /  
 anyad evānumānaṃ no narasiṃhavad iṣyate //

#### Purandara

TSP 528,9f (書名未比定, *Paurandarasūtra?*):

lokaprasiddham anumānaṃ cārvākair apīṣyata eva, yat tu kaiścil laukikaṃ mārgam atikramyānumānam ucyate, tan niṣidhyate.

#### Bhartrhari

TS 1459 = VP 1.32:

avasthādeśakālānām bhedād bhinnāsu śaktiṣu /  
 bhāvānām anumānena prasiddhir atidurlabhā //

TS 1460 = VP 1.33:

nirjñātaśakter dravyasya tāṃ tāṃ arthakriyāṃ prati /  
 viśiṣṭadravyasambandhe sā śaktiḥ pratibadhyate //

TS 1461 = VP 1.34:

yatnenānumito 'py arthaḥ kuśalair anumātrbhiḥ /  
 abhiyuktatarair anyair anyathaivopapādyate //

#### Bhāvivikta(ādi)

TSP 514,10-16 (書名未比定, *Bhāṣyaṭīkā?*):

na khalu pakṣadharmatvaṃ pratijñānantarabhāvinā hetuvacanena prakāśyate, kāraṇa-  
 mātṛābhīdhānāt. anityaḥ śabdo bhavati kṛtakatvāt, tat punaḥ kṛtakatvaṃ kiṃ śabde 'sti  
 nāstīti ceti, tasyāstitvam upanayāt pratīyate. atha vā pratibimbanārtham upanayanam,  
 pūrvaṃ hi hetuvacanena nirviśeṣaṃ kṛtakatvaṃ śabde nirdiṣṭam, tena dṛṣṭānte pradarśita-  
 sādhyāvinābhāvitvasya kṛtakatvasyopanayena pratibimbanam upanayād darśyate, tathā ca

<sup>(240)</sup>PST D82a1; P92a8 (Skt. B54a2) にも引用される。

kṛtakāḥ śabda itī. tasmād viśeṣadyotanān na punaruktateti.

### Śabaravāmin

TSP 516,25-517,8 = ŚBh 30,18-32,2:

anumānaṃ jñātasambandhasyaikadeśadarśanād ekadeśāntare 'samnikṛṣṭe 'rthe buddhiḥ. tat tu dvividhaṃ pratyakṣatodṛṣṭasambandhaṃ sāmānyatodṛṣṭasambandhaṃ ca. tatra pratyakṣatodṛṣṭasambandhaṃ yathā dhūmākṛtidarśanād agnyākṛtivyajñānam. sāmānyatodṛṣṭasambandhaṃ ca yathā devadattasya gatipūrvikāṃ deśāntaraprāptim upalabhya āditye 'pi gatismaraṇam.

### Vasubandhu

TS 1426a = AK 3.12a:

sahaikatra dvayāsattvāt.

TSP 510,22f = AKBh 120,23f:

yatraiva hi pradeśe ādarśarūpaṃ dṛśyate pratibimbakaṃ ca tatraiva. na caikatra pradeśe rūpadvayasyāsti sahabhāvaḥ, sapratighatvāt.

TSP 511,11-15 = AKBh 120,23-121,5:

atha vā sahaikatra dvayāsattvād itī. katamasya dvayasya. ādarśatalasya candrapratibimbakasya ca. anyatraiva deśe ādarśatalaṃ bhavati, anyatraivāntargataṃ candrapratibimbakaṃ dṛśyate, kūpa ivodakam. anyatra cotpadyamānaṃ kimity anyatropalabhyate. ato nāsty eva kiṃcid vastu bhūtaṃ pratibimbakaṃ nāma, sāmāgryās tu sa tasyās tādṛśaḥ prabhāvaḥ, yat tathā tad darśanam. acintyā hi dharmāṇāṃ śaktiprabhedāḥ.

### Vātsyāyana

TSP 515,10f = NBh 315,5-6:

nigamyante aneneti pratijñāhetūdāharaṇopanayā ekatrete nigamanam. nigamyante, samarthante, sambadhyante.

## 参考文献と略号 (追加分)

### < 一次文献・略号 >

- |       |   |
|-------|---|
| NBhūṣ | Nyāyabhūṣaṇa (Bhāsarvajña): SVĀMĪ YOGĪNDRĀNANDA (ed.), <i>Śrīmad-ācārya-Bhāsarvajña-praṇītasya Nyāyasārasya svopajñāṃ vyākhyānaṃ Nyāyabhūṣaṇam</i> , Varanasi 1968. |
| PKM   | Prameyakalamārtaṇḍa (Prabhācandra): MAHENDRA KUMAR JAIN (ed.), <i>Prameyakalamārtaṇḍa by Shrī Prabhācandra (A Commentary on Shrī Māṇikyanandin)</i> , Bombay 1941.  |

- PVA Pramāṇavārttika-bhāṣya or -alaṅkāra (Prajñākaragupta): RĀHULA SĀṂKṚTYĀYANA (ed.), *Pramāṇavārttikabhāṣyam or Vārttikālaṅkāraḥ of Prajñākaragupta*, Patna 1953.
- PVin(S) 1,2 Pramāṇaviniścaya, chapter 1 and 2 (Sanskrit) (Dharmakīrti): ERNST STEINKELLNER (ed.), *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya, Chapter 1 and 2*, Beijing-Vienna 2007.
- SK Sāṃkhyakārikā (Īśvarakṛṣṇa): SAHITYACARYA PT. VISHNU PRASAD SHARMA and THE 'JAYAMANGALA' OF SHRI SHANKARA (ed.), *Sāṃkhya-kārikā of Shrimad Isvarakrisna with the Matharavritti of Matharacarya*, Varanasi 1994.
- VP Vākyapadīya (Bhartrhari): K. A. SUBRAMANIA IYER (ed.), *Vākyapadīya of Bhartrhari with the commentaries Vṛtti and the Pad-dhati of Vṛṣabhadeva, kāṇḍa I*, Poona 1966.

## &lt; 二次文献 &gt;

- 赤松 [1998] 赤松明彦 (AKIHIKO AKAMATSU), 『古典インドの言語哲学 1』(東洋文庫 637), 東京 1998.
- 服部 [1969b] 服部正明 (MASAAKI HATTORI), 「古典サーンキヤ体系概説 サーンキヤ・カーリカー」, 『世界の名著 1』, 東京 1969, 189-208.
- 桂 [1977] 桂紹隆 (SHORYU KATSURA), 「因明正理門論研究 [一]」, 『広島大学文学部紀要』 37, 1977, 106-126.
- 小林 [2007] 小林久泰 (HISAYASU KOBAYASHI), 「慈悲と論証」, 『日本仏教学会年報』 72, 2007, 153-167.
- 生井 [1996] 生井智紹 (CHISYO NAMAI), 『輪廻の論証 — 仏教論理学派による唯物論批判 —』, 大阪 1996.
- PRETS[1992] ERNST PRETS, On the Development of the Concept of Parārthānumāna, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 36, 195-202.
- RAU[2002] WILHELM RAU, OSKAR VON HINÜBER (ed.), *Bhartrharis Vākyapadīya, Versuch einer vollständigen deutschen Übersetzung nach der kritischen Edition der Mūla-Kārikās*, Stuttgart 2002.



- STEINKELLNER[1963] ERNST STEINKELLNER, Zur Zitierweise Kamalaśīla's, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens* 7, 116-150.
- STEINKELLNER[1997] ERNST STEINKELLNER, Kumāriḥ, Īśvarasena, and Dharmakīrti in Dialogue. A New Interpretation of Pramāṇavārttika I 33, Petra Kieffer-Pülz Jens-Uwe Hartman (ed.), *Bauddhavidyāsudhākarah. Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday*, Swisttal-Ordendorf 1997, 625-646.
- 志賀 [2008] 志賀 浄邦 (KIYOKUNI SHIGA), 「*Tattvasaṃgraha* 及び *Tattvasaṃgrahapañjikā* 第 1 8 章「推理の考察 (Anumāna-parīkṣā)」和訳と訳注 (2)」, 『インド学チベット学研究』12, 96-136.
- 寺石 [1995] 寺石 悦章 (YOSHIKI TERAISHI), 「<他者のための推理> (parārthānumāna) に関するクマーリラの見解」, 『哲学・思想論集』13, 31-41.
- 戸崎 [1979] 戸崎 宏正 (HIROMASA TOSAKI), 『仏教認識論の研究 —法称著『プラマーナ・ヴァールティカ』の現量論—』上巻, 東京 1979.
- 畝部 [1994] 畝部 俊也 (TOSHIYA UNEBE), 「バルトリハリの推理観 —『ヴァーキヤパディーヤ』第 1 章解読研究 (1)—」, 『大谷大学大学院研究紀要』12, 1994, 1-17.
- 畝部 [1998] 畝部 俊也 (TOSHIYA UNEBE), 「バルトリハリの推理観 (2)」, 『九州龍谷短期大学紀要』44, 1998, 113-140.
- 渡邊 [1994] 渡邊 重朗 (SHIGEAKI WATANABE), 「古典 Cārvāka 派の認識論 —断片の系譜—」, 『成田山仏教研究所紀要』17, 11-130.

An Annotated Translation of the 18th Chapter (*anumānaparīkṣā*) of  
the *Tattvasaṃgraha* and *Pañjikā* thereon (3)

Summary

This article is an annotated Japanese translation of the 18th chapter (*anumānaparīkṣā*, vv. 1361-1485) of the *Tattvasaṃgraha* (=TS) and the *Tattvasaṃgrahapañjikā* (=TSP), which follows my previous paper (SHIGA[2008]). In the portion which I translate here (vv. 1455-1485), the Buddhists and several opponents have debates as to whether inference could be a valid means of cognition or not. The main subjects are as follows: (a) the proposition by the Bārhaspatya (also referred to as the Cārvāka or the Lokāyata) that inference is not a valid means of cognition, (b) the criticism of inference by the Vaiyākaraṇa, (c) the proposition held by a certain opponent that inference for others is not a valid means of cognition, (d) Purandara's view on inference, (e) problems that occur in a debate and Aviddhakarṇa's view on inference.

In the subject (a), the Bārhaspatya states that inference is not a valid means of cognition, whereas they try to make others understand their intention with this very statement. The Buddhists criticize the Bārhaspatya's behavior as being contradictory to their own words.

Bhartṛhari doubts that inference is a valid means of cognition in the subject (b). He claims that one cannot establish things by means of inference because their capacities vary according to their conditions, locations and times. In reply to this view, Śāntarakṣita and Kamalaśīla, quoting Dharmakīrti's statement, assert that if a logical reason is examined properly and the essential connection between the logical reason and what is to be proved is ascertained, the logical reason does not deviate from what is to be proved, and it is not the case that the results of inference differ depending on the inferrers' levels of proficiency.

Regarding the subject (c), a certain opponent raises an objection that inference for others is not a valid means of cognition because it is a repetition for the proponent. In reply to this, the Buddhists state as follows: it is with regard to the hearer that the statement is called 'inference for others'. Then, since a statement indicates what is capable of proving, i.e., the logical reason which possesses the three characteristics, it is called 'inference for others' on the basis of the metaphorical transference or conventions.

In the subject (d), Purandara, who is said to belong to the Bārhaspatya (or the Naiyāyika), claims that inference can be accepted also by the Bārhaspatya if it is commonly acknowledged, whereas what is called inference by certain people, which is beyond the ordinary level, is to be denied. The Buddhists reply that the inference used by ordinary people and the one used by logicians are actually the same as long as it is based on the causality or identity.

Aviddhakarṇa raises an objection in the subject (e). His view, which is often quoted as that of the Naiyāyika, is introduced here under the name of his work, the *Tattvaṭīkā*: while the inference whose nature is a statement is not a valid means of cognition for the speaker (=the proponent), he can make the hearer understand his own assertion. The Buddhists,

having accepted the view that inference for others is not a valid means of cognition for the speaker in that it does not clarify an object that is not yet known, maintain that it is a valid means of cognition in that it indicates what is capable of proving.

Through this translation, I wish to examine and analyze comprehensively various aspects of the polemics in the world of Indian logic in the 8th century, shedding light on each thought and its background of the Indian logicians who appear in this text as opponents, as well as tracing the sources of the Buddhist logic back to Dignāga and Dharmakīrti.

<キーワード> 推理論, シヤーンタラクシタ, カマラシーラ, *Tattvasaṃgraha*, *Tattvasaṃgrahapañjikā*, 他者のための推理, バールハスパティヤ派, バルトリハリ, アヴィツダカルナ, プランダラ